ISSN 0915-6119

CIRCULAIRE DE LA SOCIETE FRANCO-JAPONAISE DES ETUDES ORIENTALES
n°21 Kyoto-Tokyo, février 1997

通信

日仏東洋学会

1997年2月 東京・京都 第21号

日仏東洋学会

会　　長：福井　文雅

名誉会長：ANSART, Olivier　・　山本　達郎　・　WASSERMAN, MICHEL

顧　　問：秋山　光和　・　江上　波夫　・　藤枝　晃　・　市古　貞次
　　彌永　昌吉

評議員：　竺沙　雅章　・　DURT, Hubert　・　福井　文雅　・　濱田　正美
　　羽田　　正　・　池田　　温　・　石沢　良昭　・　石井　米雄
　　彌永　信美　・　狩野　直禎　・　加藤　純章　・　興膳　　宏
　　桑山　正進　・　京戸　慈光　・　前田　繁樹　・　松原　秀一
　　御牧　克己　・　森　由利亜　・　森安　孝夫　・　明神　　洋
　　中谷　英明　・　大谷　暢順　・　斉藤　希史　・　坂出　祥伸
　　高田　時雄　・　田中　文雄　・　坪井　善明　・　八木　　徹
　　山田　利明

代表幹事：興膳　　宏

幹　　事：濱田　正美　・　石沢　良昭　・　前田　繁樹　・　御牧　克己
　　明神　　洋　・　中谷　英明　・　斉藤　希史　・　高田　時雄
　　八木　　徹

監　　事：加藤　純章　・　岡本　さえ

会計幹事：森　由利亜

推薦委員会：福井　文雅　・　池田　温　・　加藤　純章　・　興膳　　宏
　　御牧　克己　・　山本　達郎

本　　部

〒162 東京都新宿区戸山1-24-1

早稲田大学文学部　　福井文雅研究室

事　務　局

〒606 京都市左京区吉田本町

京都大学文学部　　興膳　宏研究室

TEL:075 753 2808

編　　集

〒112 東京都文京区白山5-28-20

東洋大学文学部中国哲学文学科　山田利明

入会・会費(3,000円)

〒162 東京都新宿区戸山1-24-1

早稲田大学文学部　　森　由利亜

表紙　題字　　元の趙孟頫の六体千字文から
　　高田時雄氏集字
　　カット　イラン陶器模様（13世紀）から
　　桑山正進氏描画

日仏東洋学会会則

第１条　本会を日仏東洋学会と称する。

第２条　本会の目的は東洋学に携わる日仏両国の研究者の間に，交流と親睦を図るものとする。

第３条　本会の目的を実現するため次のような方法をとる。
（１）講演会の開催
（２）日仏学者の共同の研究及びその結果の発表
（３）両国間の学者の交流の促進
（４）仏人学者の来日の機会などに親睦のための集会を開催する
（５）日仏協力計画遂行のために学術研究グループを組織する

第４条　本会の本部は日仏会館におき，事務局は代表幹事の所属する機関内におく。

第５条　本会会員は本会の目的に賛同し，別に定める会費をおさめるものとする。会員は正会員および賛助会員とする。

第６条　正会員および賛助会員の会費額は総会で決定される。

第７条　本会は評議員会によって運営され，評議員は会員総会により選出される。評議員の任期は２年とするが，再任を妨げない。

第８条　評議員会はそのうちから次の役員を選ぶ。これらの役員の任期は２年とするが，再任を妨げない。
会長　１名　　代表幹事　１名　　幹事　若干名　　会計幹事　１名
監事　２名
日仏会館フランス学長は，本会の名誉会長に推薦される。会員総会はその他にも若干名の名誉会長・顧問を推薦することができる。

第９条　会長は会を代表し，総会の議長となる。代表幹事は幹事と共に会長を補佐して会の事務を司る。会計幹事は会の財政を運営する。監事は会の会計を監査する。

第10条　年に一回総会を開く。総会では評議員会の報告を聞き，会の重要問題を審議する。会員は委任状又は通信によって決議に参加することができる。

第11条　本会の会計年度は３月１日より２月末日までとする。

第12条　この会則は総会の決議により変更することができる。

第13条　以上の１条から12条までの規定は，1989年４月１日から発効するものとする。

STATUT DE LA SOCIETE FRANCO-JAPONAISE DES ETUDES ORIENTALES

Art.1　Il est formé une association qui prend le nom de Société franco-japonaise des Etudes Orientales.

Art.2　L'objet de la Société est de promouvoir les échanges scientifiques et amicaux entre spécialistes français et japonais des Etudes Orientales.

Art.3　Les moyens employés pour réaliser l'objet de la Société sont entre autres les suivants:
1 - Organisation de conférences,
2 - Etudes et recherches entreprises en commun par des scientifiques français et japonais et publication de leurs résultats,
3 - Développement des échanges de scientifiques entre les deux pays,
4 - Organisation de réunions amicales entre scientifques français et japonais, notamment à l'occasiondes vistes des scientifiques français au Japon,
5 - Organisation de groupes de travail spécialisés, pour la poursuite de projets coopératifs franco-japonais.

Art.4　Le siège de la Société est établi dans la Maison franco-japonaise et le bureau à l'établissement auquel appartient le secrétaire général.

Art.5　Sont membres de la Société toutes personnes qui approuvent le but de la Société et acquittent la cotisation. La Société comprend des membres ordinaires et des donateurs.

Art.6　La cotisation pour des membres ordinaires et des membres donateurs est décidée par l'Assemblée Générale.

Art.7　La Société est administrée par le Conseil d'Administration. Les membres du Conseil d'Administration sont elus par L'Assemblée Générale des membres. Ils sont élus pour deux ans et sont rééligibles.

Art.8　Le Conseil d'Administration élit dans son sein:
- 1 Président - 1 Secrétaire Général
- Plusieurs secrétaire - 1 Trésorier - 2 Auditours.
Les administrateurs ci-dessus sont élus pour deux ans et sont rééligibles.Le Directeur français à la Maison franco-japonaise est statuairement président d'honneur. En outre,
l'Assemblée Générale peut élir un ou plusieurs présidents d'honneur et plusieurs conseillers d'honneur.

Art.9　Le président représente la Société et préside l'Assemblée Générale. Le secrétaire général assiste le Président pour assurer avec les secrétaires les activités de la Société. Le trésorier gère les finances de la Société. Les auditeurs surveillent la comptabilité.

Art.10　L'Assemblée Générale se réunit une fois par an pour entendre le compte-rendu du Conseil d'Adiministration et délibérer sur les problèmes importants. Les membres de la Société peuvent voter par procuration ou par correspondance.

Art.11　L'année fiscale de la Société commence le premier mars et prend fin le dernier jour du mois de février.

Art.12　Les statuts peuvent être modifiés par décision de l'Assemblée Générale.

Art.13　Les dispositions statuaires prévues dans les articles 1 à 12 ci-dessus entreront en vigueur le premier avril 1989.

日仏東洋学会　通信　第21号　1997年2月　発行

CIRCULAIRE DE LA SOCIETE FRANCO-JAPONAISE DES ETUDES ORIENTALES

n° 21　1997

目　次

ベルナール・フランク教授の御葬儀に参列して　福井文雅 …… 1

1996年度高等研究院、コレージュ・ド・フランス開講講座 …… 6

新刊紹介

『故廣慶歓追悼中国文化史論集』

ロビネ『道教の内丹序説』

ジュフェレ『王充の思想研究』

"Journal asiatique"no. 1～no. 2, 1995.

"T´oung pao"4-5, 1995.

"Cahiers d´Extrême-Asie"t. 8, 1995.

…… 菊池章太 …… 14

スワミエ教授献呈論集『敦煌から日本へ』

…… 福井文雅 …… 20

彙　報 …… 21

1995年度総会報告 …… 25

学術会議だより …… 26

1996年度会員名簿 …… 28

ベルナール・フランク教授の御葬儀に参列して

福井　文雅

フランス学士院会員 membre de l'Institut, 日本学士院客員, 東京・日仏会館元学長, コレージュ・ド・フランス教授ベルナール・フランク Bernard Frank 博士は、10月15日（火）の午後15時15分、静養中の御自宅で亡くなられた。享年69歳。

生前フランス政府からLégion d'honneur等の勲章、日本政府から1986年に勲二等瑞宝賞を授与されている。

先生の御専門は、Collège de France の講座名と CNRS での所属研究班の名称とが示すように、「日本文明 la civilisation japonaise 」には違いなかったが、（本稿５節で改めて述べるように）実際の御業績はそのような枠を越え、フランス伝統の「（真の学者としての）東洋学者」orientalisteであった。

1927年 2月28日、パリのお生まれであったから、あと数カ月で、知友・弟子達から70歳のお祝いを受けるはずで、頌寿記念論文集も完成に近づいているところであった。

1　お見舞いした日のこと

去年の10月中旬、フランク教授は「パリ天台学国際会議」の主催者代表を務められ、同13日には学士院例会で「十六世紀のヨーロッパ人が抱いた仏像観」の講演をされ、その夕方、ギメ美術館の仏像コレクションについて上記会議の日本人参加者に解説をなさった。

しかし、その直後あたりから先生は不調を訴えられるようになり、11月、脳腫瘍と言う診断で一時自宅療養、その後入院され、夏には再び自宅療養に戻って来られた。

私は、淳子夫人とジャン＝ノエル・ロベール Jean-Noël Robert 教授との御好意で、8月19日（月）11時に、ヌーイNeuilly の御自宅に娘と一緒にお見舞いに伺うことが出来た。私事で恐縮ではあるが、この娘が生まれた時に、たまたま東京に来ておられた先生は、わざわざ吉祥寺の拙宅までタクシーに乗ってお祝いに来られたからである。

先生はそう言う細やかな行き届いた氣配りを、誰に対しても出来る方であった。

従ってお見舞いの日には、娘には通学中の lycée に早退の届けを出させて、二人して伺ったのであった。

ヌーイの御自宅は、私が留学生時代に何回か、加藤晴久君（フランス文学。後に東大教授）等と一緒に招かれて行ったことのある懐かしい場所である。

先生は、ソファに寄りかかっておられたが、思いのほか元気にお見受けした。少なくとも決して重病人には見えなかった。お話も（心なしかかなりゆっくりには思えたが）さして平常と変っては見えなかった。唯、長居は禁物なので一時間ほどで退室したが、それが最後のお別れになってしまった。

退室しようとした瞬間、先生は突然立ち上がって私を抱擁し頬ずりして、つまり極く親しい間だけでするフランス式別れの挨拶をなさった。これには馴れないことで、一瞬私は愕然とし又途惑った。この御挨拶はこれまで無いことだったからである。そして、先生はきっと、「もはやこれが最後」と覚悟の上でなさった御挨拶だ、と私には判り、密かに涙したものである。

先生は健康には注意なさる方であった。去年秋のパリ天台学会の時、皆なでモン・サン＝ミッシェル Mont Saint-Michelへ出かけて昼食に魚介類が出た。魚介類に対しては白ワインを注文するのが通例であるが、先生は敢えて赤ワインを取られた。理由は、白ワインは必ずしも健康には良くないから、であった。（注１）

2　亡くなられた日のこと

先生御逝去の報は、三時間も経たぬ内にロ

ベール信子夫人からの速報で知らされた。その後も、ジェルネ J. Gernet教授やピジョー Pigeot教授等々の知友多数からも電話が入ったが、先日お会いしてからまだ二ヵ月も経っていなかったので、「こんなに早く」と実は意外な感に打たれたが、それには次のようなわけがあったようである。

フランク先生は自分の病気が単なる脳腫瘍では無いことを悟られると、一切の治療を辞退されたからであった（脳内に星状に癌が拡散した難病であった）。最後には、投薬さえ口を閉じて受け付けようとはされなかった、と聞く。

それ以前に、先生の知人が一切の治療を辞退して見事な最後を遂げられた姿を先生は目の当たりにして、もしかの時には自分もそうありたいものだ、と普段から口にしておられたそうである。

従って先生は、カトリック神父に会って最後の秘蹟を授かった後、引き続いて、（C.N.R.S.研究員のドベルグ Debergh美那子夫人その他の方々の話を総合すると）フランス人で真言宗僧侶に成っておられるビヨ師le Révérend Yukaï Billaudに般若心経を唱えて戴きつつ、苦しみ無く徐々にあの世に旅立たれたそうである。

日本仏教を研究されたとは言え、ここまで来られれば学問と実践との「教観二門」一致の境地、実に見事な御最後、大往生としか言いようが無い。

その最後を、10月18日の『ル・モンド』*Le Monde* 紙は大きく取り上げ、フィリップ・ポンス Philippe Pons記者は次のように綴っている —

それほどまでに仏教に親しんでいたベルナール・フランクは、仏教から一つの偉大な教訓を引き出していた。それは、「すべてをありのままに受け入れる acceptation」と言うことであった。彼は読経の内に息を引きとった。

この追悼文には「東洋学の偉大な人物」Une des grandes figures de l'orientalisme と言う副題が添えてあった。

日本は良き外護者を失ったものである。9月24日の『ル・モンド』紙 *Le Monde* は、一面フランク教授との（実際には、かなり以前に遡る日の）対談記事を載せている。それは、先生との間での日本文化論であるが、総題は「日本では、自己抑制は社会的行動の一規範なのである」となっている。（戦争中の軍隊による行動等から）日本人は狂暴だと言う西欧一部の通念に対して、教授は、同僚間の融和を重視し、愛想の良さを尚ぶ氣風が日本の社会には強い事実を述べて、外国人の無用な誤解を解こうとしておられたのである。

3　御葬儀の日

葬儀は10月18日（金）15時半から、パリ北西端、ヌーイのサン・ピエール寺院 l'église Saint-Pierre de Neuillyでカトリック教会葬で行われた。教会は、先生の御自宅からはシャルル・ド・ゴール大通り Avenue Charles de Gaulle を挟んで丁度反対側にある。

*Le Monde*紙10月18日の死亡広告欄には、上掲の特別訃報記事の他、フランク家に次いで、コレージュ・ド・フランスの教授団、CNRSの日本文明研究班 URA 1069 （日本学高等研究所）全員等の名で、敬弔の文と御葬儀の日時とが公示された。

当日、会葬者は堂に溢れ、献花は置く場所が無くなるほどであった。日佛会館元学長のヴァンデルメルシュVandermeersch 教授夫妻、中国古典文学のエルヴーエット Hervouet 教授、ディエニ Diény教授夫妻、中国現代文学のバディ P. Bady教授等々、日本学以外の学者も多数見えた。

パリ在住の日仏関係者は悉く参列した感があり、会葬者の中には、ローザンヌ市立民俗博物館東洋部長でスイス信楽寺副住職のジェローム・デュコールJérome Ducor（日本仏教

で使う改良服を着て臨まれた）氏、カンヌから駆けつけて来られたドゥノヴァル Denoval 氏、北京大学元教授の張廣達博士、パリ日本館相良憲昭館長、建設中の日本文化会館磯村尚徳館長、ギメ東洋美術館のジャリージュ Jarrige 館長、松原秀一慶応大学名誉教授、呉 Wu Chiyu 博士、高橋明也国立西洋美術館主任研究官等々、「朝野の貴顯、一同に会す」如きであり、フランク先生の学問の広さ（本稿５節で再述）、人望の厚さが偲ばれた。

弔文の中には、日本から東方学会名誉会長（日佛東洋学会名誉会長）山本達郎、同理事長高崎直道、早稲田大学名誉教授三崎良周各位の名があった。「日佛東洋学会」からは、事務局から献花と弔電とが届いていた。

最後に、ビヨ師が佛僧の立場から追悼の辞を述べ、フランク教授の仏教への帰依の情を強調された。

終って教会を出ると、朝からの雨模様の天氣は本格的な雨に変っていた。

こえて10月21日（月）10時45分から、ペール・ラシェーズ Père-Lachaise 霊園内の火葬場で御遺体は火葬に付された。キリスト教の葬儀での火葬は余り一般的ではない。しかし、仏教への先生の帰依のお氣持を考えると、キリスト教国とは言え火葬は決して不自然ではなく、まして、奥様が日本へ分骨を予定しておられたので、むしろ自然の成り行きに思えた。

火葬場への出席者は約百五十人。地階の火葬場ではマルタン François Martin教授が遺族に代って挨拶に立たれた。御遺骨を待つのはドーム型の広間であったが、この祭場に特定の宗教色は無い。ここには、葬儀の教会に飾られていた「献花」の内から、次のリボンがかかった花輪が選ばれて飾られてあった。

フランス国内から「フランク家一同」の他、ギメ美術館（友人一同），フランス極東学院，フランス駐在日本大使館，コレージュ・ド・フランス。

日本から、日佛東洋学会。

待ち時間の間に、会葬者の有志が持参した日本の線香で参列者が次々に焼香し供養した。

私も娘と、また家内も偶々パリに来ていたので、共々列に加わった。私は海外に出る時には天台宗の輪袈裟と小経の経本を持参することを常としているので、それを着用した。

火葬場を退出した時、骨壺（日本のとほゞ同じ型）を抱かれた淳子夫人は、私に「こんなに小さくなってしまって」と言われた。フランク先生は長身の偉丈夫だったのである。

4　佛　縁

この葬場に来るのは何年振りのことであったか。私は33年前に、同じこの場所に一人で座っていた日の事を思い出した。実は、同じ留学生仲間で無二の親友であった梅垣浩一君（京都大学大学院）が、自分の運転する車で衝突事故を起して死亡し、仏式の葬儀を大学都市の日本館広間で済ませた後、弥永康夫氏（現、駐日フランス大使館）と共に、火葬の為にここに来たことがあるからである。

まさか今度はフランク先生の為にここに来るとは。しかも、偶然とは言え、私の家内も娘も揃ってパリにいて、葬儀に参列している。この巡り合わせに私は、どうしても「仏縁」の不思議、冥合を考えざるを得なかった。

仏教に帰依する点多大なものがあったフランク教授に、不思議があって可怪しくはない。

「仏縁」の不思議を考えたには、もう一つ理由がある。それは、フランク先生の愛弟子のロベール教授が、フランク先生御逝去の時に限って日本にいて、しかも丁度葬儀の頃に東京の日仏会館でフランク先生追悼の講演をすることが出来たことである。

彼は、自分の講演題目を急遽変更して、フランク先生を偲ぶ会に切り換えたのであった。（何故か、この会の連絡が日佛東洋学会の会員に行き届かなかったらしいのは、残念であ

った。）

こうも全てが先生御逝去の時に符合すると、それらを単なる偶合として片づけることは出来ない、と私は思った。

ロベール氏は、先約の公用とは言え、命旦夕に迫っている先生を置いてパリを発つことに大変ためらいがあった。出かける数日前の10月10日にカフェ Aux Deux Magotsでロベール夫妻と私共夫婦が会って相談した時、彼が帰国するまで先生の御容態が急変しないことを、皆な祈ったものである。

しかし、私共の願いも虚しく終った。

ロベール氏は先生の葬儀に出られなかったことを、大変悔やんだ。しかし、彼が日本にいたからこそ、フランク教授の業績を十分に日本人は知ることが出来たのである。私は、「先生が力を盡して来られた日仏交流の一助として、最後のきわにも愛弟子を日本に派遣した、と考えたらどうか。先生の最初の業績は、方忌（かたいみ）と方違（かたたがえ）の研究だ。大兄がパリではなくて日本に行ったのも、先生の研究のお導きだったのではないか」などと、余り理屈にもならぬ理屈を述べて、彼を慰めるしかなかった。

5　フランク教授の遺産

フランク先生は数多くの俊秀を育てられた。先生は、日本学だけではなく、東洋学の各部門にも目が届く方であったからである。

その適切な例なので私事を引くことをお宥し願うならば、私が1973年 6月26日に、『漢訳仏典より見たる「道教」と「道士」』と言う研究発表を早大文学部でした時のことである。（注２）先生はわざわざ聞きにこられ、質問の時間に、（私が資料とした）「梵志」は brahmacārinの異訳ではないのか？　と言う貴重且つ鋭い質問を出された。

また、1989年12月に、パリのアジア協会月例会で私が「玄奘以前の般若心経」の研究発表をした時には、サンスクリット真言の綴りについてやはり鋭い指摘をされた。（注３）

日本学だけの学者では中々出来ないことであった。つまり先生は、狭い意味の日本学者ではなくて、その枠の内には留まらず、広く東洋学の素養の上に立って自分の専門を究め深める、と言うフランス伝統の学問の方法を実践出来る方であった。

その素養は、東洋語語学校の日本語科と中国語科を卒業、さらにパリ大学内のインド文化研究所でサンスクリットを学んだ頃から蓄えられていた。

フランク教授の先生はアグノエール Haguenauer 教授。日本語の音韻学研究者であり、フランク教授は自分で日本宗教史道は切り開いたと言えるのではなかろうか。

実にorientalisteの名に値するだけの広い学問は、御葬儀当日、御遺族から会葬者に配られた、先生のかつての講演原稿に現れている。

それは、佛紀2618年・UNESCO VESAK 1994の会で読まれた La Stance Aniccā vata saṅkhārā et la tradition japonaise （諸行無常の偈と日本的伝承）であった。それは平家物語冒頭の文の引用から始まり、パーリ語テキストに依って「諸行無常」の説明に移り、漢訳とパーリとに依る所説の比較、『大般涅槃経』、それに関連してフランスの学者ピジルスキ Jean Przyluski, フィリオザ Jean Filliozat, ミュスPaul Musの論文が引かれ、話は日本に移って雪山童子、玉虫の厨子、三宝絵における偈文の日本への受容が説かれ、最後に「今様いろは歌」の訳注を示し、「いろは歌の名を知らぬ日本人はいないが、パーリ語での素晴らしい朗詠を聞いて、それがいろは歌の遙か昔の姿だと判る人は稀である。」の文で終えている。

短いながらも、この論文には東西古今に渉るフランク教授の学識が遺憾なく発揮されており、インドと日本との差、日本の独自性がはっきりと描かれているように、私には理解

された。先生が単なる日本学者ではなくて、フランス伝統の「東洋学者」orientalisteと呼ばれる所以である。

日本学としては初めてコレージュ・ド・フランスに講座を開くことが出来たのも、その為であったろう。

上の例で見るように、フランク教授の学殖は日本学の範囲を超えていた。それなればこそ、新しい発見も可能であった。法隆寺の阿弥陀如来の三体の内、廃佛毀釈の折りに失われた勢至菩薩（鎌倉時代）が、先年パリのギメ美術館の倉庫の中から発見され、内外で評判になったことがあるが、その発見者はフランク教授なのであった。

先生に依る『今昔物語』のフランス語訳注も、仏教から中国に渉る広く様々な学識があってこそ出来た仕事であった。

先生は学の人であると同時に、情の人でもあった。私は留学から帰って、1995年頃のフランク先生（当時講師）について、次のように書いている　―（注４）

氏のお世話にならなかった日本人は少ないであろう。例えば、日本人留学生の船荷が毎年途中で盗難に遭っている〔中略〕筆者がフランスの報道機関に訴えようとした時、フランク氏は私を援助して外務大臣あての直訴状を書いてくれた。また、親友の梅垣浩一君が自動車のパンクの事故によって不慮の死をとげた事件の時、真先に経済的援助を申し出られたのもフランク氏であった。その正義感と責任感に満ちた学徳兼備の人柄は、私共の終生忘れ得ざるものである。（云々）

6　Epilogue

内外に多数の知己、弟子を持たれた他、御家庭にも恵まれ、抽象画家として高名の淳子夫人と、お子さん方は既に社会人として活躍しておられるので、早過ぎたには違いないにしろ、先生に後顧の憂いは無かったであろう。

しかし、フランスの学界全体の現状を、パリに住んで見渡していると、もう少し先生には長生きをして戴きたかった、と私は思う。

先生は、フランス東洋学界には（良い意味での）隠然たる勢力をお持ちであった。独り日本学ばかりでなく、その枠を超えて、フランス東洋学全体に目が届き、且つ束ねることの出来る人であったからである。

しかし、今後先生のように成れるのは誰なのか？　先生亡き後、日本の学界からも尊崇され、太いパイプを持つことの出来る人は誰なのか？　或いは誰がそう成れるのか？

そう言う人がいないと、学界は唯我独尊の集まりと化し、方向を失い空中分解しかねないものである。上の問題は日本の東洋学の行く末に即響いて来る問題である。「在外研究員」としての私への宿題でもある。

先生は日本全国のお寺を廻っては御札を集め、日本宗教研究の一助としておられた。その成果は『日本・中国の宗教文化の研究』（1991年．平河出版社）に日本文で出ている。御札を編年史的に研究して行くと、確かにそこに日本人の宗教観の変遷が浮き出て来るのである。

近年はコレージュ・ド・フランスで「鬼」について講義を続けておられた。

あの世に籍を移されても、鬼を従えて御札探しの遍路を続けておられるのであろうか。

「あのですね〔こう切り出されるのが、先生の癖であった〕、ここも中々面白いですよ。いらっしゃいませんか」などと、長身の背を屈めながら、少し悪戯っぽく独特の口調で話かけられる先生の声が聞こえるようである。

南無一切三宝　　合掌

1996年11月19日　初雪の舞う朝

パリ16区 Agar 街寓居にて

（注１）フランク教授が出席した最後の国際会議は「パリ天台学国際会議」であった。

この会議については、阿、林共著の同名報告が詳しい。Cf. 早稲田大学東洋哲学会『東洋の思想と宗教』13号（1966・3)。又、『東方学』92輯（1996・7)の同名拙稿。

（注２）後に「道士と道人－その語義史－」（東大・東洋文化研究所『東洋文化』57号 1977・3 月）として発表。

（注３）その因縁があって、来春刊行される先生への記念論文集にはその研究発表を献呈した。唯、フランス語題名は少し捻って *À la recherche du sūtra perdu*（失われた経を求めて）に直した。このプルーストもどきの題名には、先生もニヤリとされたのではないかと思うと、お目にかけられなくなって誠に残念である。

（注４）拙著『欧米の東洋学と比較論』（隆文館、1991)，p. 152

1996－1997 コレージュ・ド・フランス開講講座(東洋学関係)

ANTIQUITÉS SÉMITIQUES

M. Javier TEIXIDOR, professeur

Aristote en syriaque : les philosophes de la Haute Mésopotamie au VIe siècle (suite), les lundis, à 14 h 30, dans la salle de Conférences (52, rue du Cardinal Lemoine, Paris 5e). *(Ouverture le 6 janvier.)*
Séminaire : *Documents d'histoire araméenne,* les lundis, à 15 h 45, dans la salle de Conférences (52, rue du Cardinal Lemoine, Paris 5e). *(Ouverture le 6 janvier.)*

LANGUE ET LITTÉRATURE ARABES CLASSIQUES

M. André MIQUEL, professeur

Regards sur l'histoire et la littérature des Arabes, les mardis, à 18 heures, dans la salle de Conférences (52, rue du Cardinal Lemoine, Paris 5e). *(Ouverture le 7 janvier.)*
Séminaire : *Ibn Khafâja, poète andalou,* les mardis, à 16 h 30, dans la salle de Conférences (52, rue du Cardinal Lemoine, Paris 5e). *(Ouverture le 7 janvier.)*

LANGUES ET RELIGIONS INDO-IRANIENNES

M. Jean KELLENS, professeur

Les mazdéens ont-ils eu un livre sacré ? (variations et suite), les vendredis, à 9 h 30, dans la salle de Conférences (52, rue du Cardinal Lemoine, Paris 5e). *(Ouverture le 11 octobre.)*
Séminaire : *Lecture de quelques hymnes à Indra,* les vendredis, à 11 heures, dans la salle de Séminaires (52, rue du Cardinal Lemoine, Paris 5e). *(Ouverture le 11 octobre.)*

HISTOIRE DU MONDE INDIEN

M. Gérard FUSSMAN, professeur

Les Saddharmapundarika sanskrits (II), les jeudis, à 18 heures, dans la salle de Conférences (52, rue du Cardinal Lemoine, Paris 5e). *(Ouverture le 3 octobre.)*
Séminaire : *Chanderi : medieval and contemporary socio-economic data,* les vendredis, à 14 h 30, dans la salle de Séminaires (52, rue du Cardinal Lemoine, Paris 5e). *(Ouverture le 4 octobre.)*

HISTOIRE DE LA CHINE MODERNE

M. Pierre-Étienne WILL, professeur

La pensée économique et le marché en Chine des Song à la fin de l'empire (suite), les mercredis, à 14 h 30, dans la salle de Conférences (52, rue du Cardinal Lemoine, Paris 5e). *(Ouverture le 22 janvier.)*
Séminaire : *Histoire et métamorphoses d'un manuel de médecine légale en Chine (XIIIe-XIXe siècles),* les mercredis, à 15 h 45, dans la salle de Séminaires (52, rue du Cardinal Lemoine, Paris 5e). *(Ouverture le 22 janvier.)*

CIVILISATION JAPONAISE

M. Bernard FRANK, membre de l'Institut, professeur

Le cours n'aura pas lieu.

HISTOIRE DE ROME

M. Paul VEYNE, professeur

L'Art gréco-romain à partir des Sévères, **les mercredis, à 14 heures, dans la salle 1.** *(Ouverture le 8 janvier.)*
Séminaire : *Textes et documents du Haut-Empire*, **les mercredis, à 15 heures, dans la salle 1.** *(Ouverture le 8 janvier.)*

HISTOIRE ÉCONOMIQUE ET MONÉTAIRE DE L'ORIENT HELLÉNISTIQUE

M. Georges LE RIDER, membre de l'Institut, professeur

Après Alexandre : un essai d'économie libérale dans l'Orient des Séleucides, **les mercredis, à 17 heures, dans la salle 1.** *(Ouverture le 8 janvier.)*
Séminaire : *en relation avec le sujet du cours*, **les mercredis, à 18 heures, dans la salle 1.** *(Ouverture le 8 janvier.)*

HISTOIRE ET CIVILISATION DU MONDE BYZANTIN

M. Gilbert DAGRON, membre de l'Institut, professeur

Verts et Bleus de Constantinople. Étude d'histoire sociale, **les jeudis, à 14 h 30, dans la salle de Conférences (52, rue du Cardinal Lemoine, Paris 5e).** *(Ouverture le 9 janvier.)*
Séminaire : *Le cérémonial de l'Hippodrome*, **les jeudis, à 11 heures, dans la salle du Centre d'Histoire et Civilisation de Byzance (52, rue du Cardinal Lemoine, Paris 5e).** *(Ouverture le 3 octobre.)*

1996－1997 フランス国立高等研究院開講講座（東洋学関係）

【第４部門】

PHILOLOGIE ARABE

Directeur d'études, M. Gérard TROUPEAU : I. *Explication du* Kitâb al-Iqtirâh fi'ilm usûl al-nahw d'al-Suyûti, *grammairien égyptien du XVe siècle.* — II. *Le* Kitâb Kâmil al-sinâ'a al-tibbiyya d'al-Majûsi : *étude du texte arabe et de la version latine (livre V)*, les jeudis de 16 à 18 h.

SOURCES EUROPÉENNES DE L'HISTOIRE DU MAGHREB, XVIe-XIXe SIÈCLES

Chargé de conférences, M. Ahmed FAROUK : I. *Pouvoirs et communautés au Maghreb, 1492-1578.* — II. *Analyse de documents diplomatiques*, les mercredis de 16 à 17 h.

HISTOIRE ET CRITIQUE TEXTUELLE DES DOCUMENTS ARABES ET SYRIAQUES

Directeur d'études, M. Henri HUGONNARD-ROCHE : *La tradition aristotélicienne en arabe et en syriaque*, les mercredis de 17 à 19 h.

ANTIQUITÉS ET CODICOLOGIE ARABES

Directeur d'études, M. François DÉROCHE : I. *L'enluminure aux XIIIe et XIVe siècles.* — II. *Les manuscrits arabes datés (suite)*, — III. *Questions de codicologie*, les lundis de 10 à 12 h.

PALÉOGRAPHIE ET ÉPIGRAPHIE ARABES

Directeur d'études, Mme Janine SOURDEL-THOMINE : I. *Questions d'épigraphie arabe.* — II. *Étude d'inscriptions monumentales et de documents d'archive*, les 3e jeudis de 14 à 16 h.

CÉRAMIQUE ISLAMIQUE ET ICONOGRAPHIE

Chargée de conférences, Mme Claude-Yvette IMBERT-MATHIAS : *Constitution collective d'un fichier informatique des céramiques islamiques*, les 2e et 4e jeudis de 14 à 16 h.

NUMISMATIQUE ET DIPLOMATIQUE ISLAMIQUES

Directeur d'études : M. Ludvik KALUS : I. *Monnaies des Seldjoukides.* — II. *Inscriptions sur les épées islamiques.* — III. *Pétitions ayyoubides et mamelouks*, les mercredis de 12 à 14 h.

ARCHÉOLOGIE MUSULMANE

Directeur d'études, M. Michel TERRASSE : I. *Villes, mouillages et terroirs aux rives de la Méditerranée islamique.* — II. *Traitement automatique de données en histoire et archéologie islamiques (urbanisme, architecture, décor)*, les vendredis de 16 à 18 h. Une conférence destinée aux jeunes chercheurs est prévue, avec la collaboration de M. Daniel RODOLPHE, les lundis de 9 à 11 h.

HISTOIRE ET PHILOLOGIE TURQUES

Directeur d'études, M. Louis BAZIN, membre de l'Institut : *Le Livre de Dede Korkut (suite)*, les lundis de 10 à 12 h (du 18 novembre à la fin du semestre d'hiver).

Directeur d'études, Mme Irène BELDICEANU : I. *Les débuts de l'État ottoman : une nouvelle approche (suite).* — II. *Exercices de paléographie ottomane*, les jeudis de 10 à 12 h.

HISTOIRE DE L'IRAN ISLAMIQUE

Chargé de conférences, M. Jean CALMARD : *L'image de l'Iran dans les sources européennes, XVIe-XIXe siècles*, les 2e et 4e jeudis de 14 à 16 h.

LIBYQUE ET BERBÈRE

Directeur d'études, M. Lionel GALAND : I. *Textes en tifinagh.* — II. *Dialectologie*, les 2e et 4e vendredis du mois de 17 à 19 h. — III. *Épigraphie*, les autres vendredis de 17 à 19 h.

HISTOIRE DES RELATIONS ENTRE L'EUROPE ET L'ORIENT (XVIe-XIXe SIÈCLES)

Conférence commune de MM. Jean AUBIN et Bruno NEVEU, directeurs d'études, avec le concours de M. Jacques PAVIOT et de Mlle Anne KROELL : I. *Les Européens en Asie : leurs témoignages aux XVIe, XVIIe et XVIIIe siècles, qualités et lacunes* (Mlle KROELL), les vendredis de 18 à 20 h. — II. *L'Europe occidentale et l'Empire Ottoman* (M. Jacques PAVIOT), les 2e et 4e mercredis de 14 à 16 h.

RELATIONS ENTRE L'EUROPE ET L'ORIENT

Chargé de conférences, M. Jacques PAVIOT : Le programme sera affiché ultérieurement à la Section.

SANSKRIT

Directeur d'études, M. Pierre-Sylvain FILLIOZAT : I. *Poésie sanskrite : explication du* Harshacarita. — II. *Le travail intellectuel dans l'Inde ancienne : la poétique*, les lundis de 18 à 20 h.

HISTOIRE DES SCIENCES DANS L'INDE

Chargé de conférences, M. Guy MAZARS : I. *Modes de vie et santé selon l'Āyurveda.* — II. *Un traité médical médiéval : la Śārngadharasamhitā*, les 1er et 3e lundis de 16 à 18 h.

HISTOIRE ET PHILOLOGIE DE L'INDE OCCIDENTALE AU MOYEN ÂGE

Directeur d'études, Mme Françoise MALLISON : I. *Vies et poésie mystique des saints intouchables du Saurashtra (Gujarat)*, les 1er et 3e lundis du mois de 18 à 20 h. — II. *Problèmes d'histoire de la littérature gujarati : pluralisme religieux, nationalisme régional et panindianisme (suite)*, les 1er et 3e mardis du mois de 10 à 12 h.

LA TRANSMISSION DU RÉPERTOIRE MÉDIÉVAL BHOJPURI EN INDE DU NORD FORMES ORALES ET LIVRETS DE COLPORTAGE

Chargé de conférences, Mme Catherine CHAMPION : Le programme sera affiché ultérieurement à la Section.

HISTOIRE ET PHILOLOGIE DE L'INDE MÉRIDIONALE

Directeur d'études, M. François GROS : I. *Explication de textes tamouls anciens (sangam et textes de Bhakti) (suite).* — II. *Tradition littéraire et histoire culturelle (suite)*, les mardis de 18 à 20 h.

ÉPIGRAPHIE DE L'INDE ET DE L'ASIE DU SUD-EST

Directeur d'études, M. Claude JACQUES : I. *Histoire du pays khmer : L'époque angkorienne : Jayavarman V et ses successeurs.* — II. *Étude de l'inscription de Sdok Kak Thom K 235*, les lundis de 14 h 15 à 16 h 15.

HISTOIRE ET ARCHÉOLOGIE DES ÉTATS CÔTIERS DE L'ASIE DU SUD-EST

Chargé de conférences, M. Pierre-Yves MANGUIN : I. *La formation des premiers États marchands d'Asie du Sud-Est (suite).* — II. *Étude archéologique des sites portuaires de Sumatra-Sud à l'époque de Sriwijaya (VIIe-XIIIe siècles) (suite)*, les mardis de 12 à 14 h.

HISTOIRE ET CIVILISATIONS DE LA PÉNINSULE INDOCHINOISE

Directeur d'études, M. NGUYÊN THÊ ANH : *Les sociétés face à la modernité (fin du XIXe siècle-début du XXe siècle) :* I. *Au Viêt-Nam*, les 1er et 3e lundis de 14 à 16 h. — II. *Dans le reste de la Péninsule indochinoise*, les 1er et 3e mardis de 16 à 18 h.

Maître de conférences, Mme Thanh-Tâm LANGLET : I. *Histoire de la pensée viêtnamienne : traditions et modernités*, les 1er et 3e vendredis de 10 à 12 h. — II. *Études de textes*, les 1er et 3e vendredis de 15 à 17 h.

HISTOIRE ET PHILOLOGIE TIBÉTAINES

Directeur d'études, Mme Ariane SPANIEN : *Les fêtes instituées par Mu-ne btsan-po au VIIIe siècle et leurs prolongements (suite)*, les mercredis de 17 à 19 h.

SCIENCES ET CIVILISATION DU MONDE TIBÉTAIN

Directeur d'études, M. Fernand MEYER : I. *Les conceptions indo-tibétaines relatives au corps et à la vie (suite).* — II. *Aspects rituels et matériels des techniques de longévité visant à absorber les essences (bcud len)*, les jeudis de 18 à 20 h.

HISTOIRE DES CONCEPTIONS RELATIVES A LA MÉDECINE ET A LA NATURE EN CHINE

Chargé de conférences, M. Frédéric OBRINGER : Le programme sera affiché ultérieurement à la Section.

ARCHÉOLOGIE DE LA CHINE

Directeur d'études, Mme Michèle PIRAZZOLI-t'SERSTEVENS : I. *L'image de l'immortel dans l'art Han (IIIe s. av.-IIIe s. ap. J.-C.).* — II. *La porcelaine chinoise (XIVe-XVIe s.) trouvée sur le site de Julfar (E.A.U.)*, les mercredis de 12 à 14 h.

ART ET ARCHÉOLOGIE DE LA CHINE PRÉ-IMPÉRIALE

Chargé de conférences, M. Alain THOTE : *Scènes de la vie aristocratique aux VIe-Ve s. av. J.-C. d'après les bronzes historiés*, les 1er et 3e lundis de 14 à 16 h.

HISTOIRE ET PHILOLOGIE DE LA CHINE CLASSIQUE

Directeur d'études, M. Jean-Pierre DIÉNY : *Le rêve dans la Chine ancienne*, les 2e et 4e lundis de 14 à 16 h.

Directeur d'études, M. François MARTIN : I. *Groupes, réunions et jeux littéraires sous les Six Dynasties (suite).* — II. *Recherches sur le Shijing (les citations du Shijing dans le Zuozhuan, la composition du recueil)*, les mardis de 12 à 14 h.

HISTOIRE ET CIVILISATION DE L'ÉCRIT EN CHINE

Directeur d'études, M. Jean-Pierre DRÈGE : I. *L'épigraphie sous la dynastie des Song* — II. *Récits de voyage en Asie centrale à l'époque des Tang*, les mardis de 14 à 16 h.

ÉCONOMIE ET SOCIÉTÉ DE LA CHINE MÉDIÉVALE

Chargé de conférences, M. Eric TROMBERT : *Les bases matérielles de la vie quotidienne à Dunhang et à Turfan*, les 2e et 4e lundis de 16 à 18 h.

HISTOIRE ET PHILOLOGIE JAPONAISES

Directeur d'études, Mlle Francine HÉRAIL : I. *La justice dans le Japon ancien d'après le* Hossó shiyóshó *(suite).* — II. *Le Shunki, notes journalières de Fujiwara no Sukefusa (1007-1067)*, les lundis de 18 h 30 à 20 h.

Directeur d'études, Mme Charlotte von VERSCHUER : I. *Les objets d'usage de la cour du VIIIe siècle.* — II. *Le* Zenrinkoku-hôki, *"Relations de bon voisinage" (1470), partie du IIIe-XIIIe siècle*, les lundis de 16h30 à 18h30.

GRAMMAIRE COMPARÉE DES LANGUES INDO-EUROPÉENNES

Directeur d'études, M. Jean HAUDRY : I. *Recherches sur le vocabulaire psychologique et métaphysique de l'indo-européen (suite)*, les 2e et 4e mercredis de 10 à 12 h. — II. *Introduction au védique*, les 2e et 4e mercredis de 13 à 14 h. — III. *Les hymnes funéraires du* Rgveda *et de l'*Atharvaveda. *Devas et asuras dans le* Rgveda, les 2e et 4e mercredis de 14 à 16 h.

Directeur d'études, Mme Françoise BADER : I. *Le verbe indo-européen : expansion de la conjugaison.* — II. *Reconstruction culturelle et étymologies ; morphologie verbale ; phonétique historique des laryngales*, les mercredis de 16 à 18 h.

Directeur d'études, M. Charles de LAMBERTERIE : I. *Le système phonétique de l'indo-européen.* — II. *Les traductions anciennes de l'Évangile*, les jeudis de 10 à 12 h.

PHILOLOGIE DES TEXTES BOUDDHIQUES D'ASIE CENTRALE

Directeur d'études, M. Georges-Jean PINAULT : *Lecture de textes tokhariens.* — *II. Aspects du vocabulaire bouddhique*, les mardis de 9 à 11 h.

LINGUISTIQUE ET PHILOLOGIE IRANIENNES

Directeur d'études, M. Gilbert LAZARD, membre de l'Institut : La conférence n'aura pas lieu en 1996-1997.

Directeur d'études, M. Pierre LECOQ : *Lecture de textes manichéens en langues iraniennes (moyen perse, parthe et sogdien), avec une introduction grammaticale,* les mardis de 12 à 14 h.

LANGUES ET CIVILISATIONS DU CAUCASE

Chargé de conférences, M. Georges CHARACHIDZÉ : *Histoire des sociétés caucasiennes du Nord-Ouest,* les 1er et 3e mardis de 16 à 18 h.

【第5部門】

BOUDDHISME D'ASIE DU SUD-EST

Directeur d'études : **M. François BIZOT**

Theravada : 1. *Sémiologie historique du costume monastique.* 2. *Symbolisme des pièces du vêtement,* les jeudis de 18 h. à 20 h.

RELIGIONS DE L'ASIE SEPTENTRIONALE

Directeur d'études : **Mme Roberte HAMAYON**

Contacts entre chamanismes et religions universalistes, à partir d'exemples du christianisme orthodoxe et du bouddhisme lamaïque en Sibérie, les jeudis de 10 h. à 12 h. - *Initiation aux chamanismes sibériens. Travaux dirigés (2e semestre),* les jeudis de 12 h. à 13 h.

Directeur d'études invité : **M. Pierre CENTLIVRES**

Les sujets, jours et heures seront précisés ultérieurement.

RELIGIONS TIBÉTAINES

Directeur d'études : **Mme Anne-Marie BLONDEAU**

1. *La périodisation de l'histoire du Bon, selon les traditions bouddhistes et bon po.* - 2. *Signes et marques corporelles comme preuves de réincarnation ndan une lignée de* sprull sku ? *(suite),* les jeudis de 11 h. à 13 h. Cf. aussi *infra* : conférences d'introduction, les jeudis de 10 h. à 11 h.

Chargé de conférences : **M. Stéphane ARGUILLERE**

Introduction à la lecture des textes philosophiques en langue tibétaine (le lTa ba'i shan 'byed *de* Go rams pa bsod nams seng ge*),* les mercredis de 17 h. à 19 h. tous les quinze jours.

Directeur d'études invité : **M. Katsumi MIMAKI**

Doctrines bouddhiques et bon po *exposées par un auteur* bon po *du XIVe siècle,* Tre ston rGyal mtshal dpal, les jours et heures seront précisés ultérieurement.

RELIGIONS DE LA CHINE

Directeur d'études : **M. Kristofer SCHIPPER**

1. *Histoire religieuse de la ville de Pékin : temples et stèles (connaissance du chinois indispensable)*, les samedis de 10 h. à 12 h. - 2. *Travaux d'etnnopsychiatrie*, les samedis de 12 h. à 13 h. (cette heure correspond à un module de 25 heures pour les étudiants de DEA; elle est également accessible aux auditeurs non sinologues agréés par le Directeur d'études).

Chargé de conférences : **M. Franciscus VERELLEN**

Recherches sur l'histoire du taoïsme, les jours et heures seront précisés ultérieurement.

SYSTÈMES DE CROYANCE ET DE PENSÉE DU MONDE SINISÉ

Directeur d'études : **M. Marc KALINOWSKI**

1. *Les philosophes et la divination : lectures de textes préimpériaux et des Han* - 2. *Savoirs traditionnels et pensée critique sous les Song : lecture des chapitres sur les Figures et les Nombres dans le* Mengxi bitan *de Shen Gua (1029-1093)*, les vendredis de 14 h. à 16 h.

Directeur d'études invité : **M. Donald HARPER**

Les sujets, jours et heures seront précisés ultérieurement.

RELIGIONS ET TRADITIONS POPULAIRES DU JAPON

Directeur d'études : **M. Hartmut O. ROTERMUND**

1. *Le bouddhisme et les étrangers. Religion et politique à l'ère Meiji (II).* - 2. *Clergé et laïcs dans la littérature des setsuwa*, les vendredis de 16 h. à 18 h. - 3. Travaux pratiques : lecture de livres illustrés, les vendredis de 18 h. à 19 h.

Chargé de conférences : **M. Jean-Pierre BERTHON**

La religion dans le Japon d'aujourd'hui : diversité des formes et des pratiques, les jours et heures seront précisés ultérieurement.

Directeur d'études invité : **M. Kesao MIYAMOTO**

Les sujets, jours et heures seront précisés ultérieurement.

BOUDDHISME JAPONAIS

Directeur d'études : **M. Jean-Noël ROBERT**

1. *Le* Commentaire du Traité du Lotus *d'Enchin (connaissance du chinois classique ou du sino-japonais indispensable).* - 2. *Le* Konjaku monogatari *et ses sources : introduction (connaissance du japonais classique indispensable*

et notions de sino-japonais recommandées), les mercredis de 18 h. à 20 h. (chaque semaine en alternance) - Cf. aussi *infra* : Conférences d'introduction, les mardis de 18 h. à 20 h.

Directeur d'études invité : **M. Tetsuo YAMAORI**
Les sujets, jours et heures seront précisés ultérieurement.

RELIGIONS DE L'INDE

Directeur d'études : **M. Charles MALAMOUD**
1. *Temps mythique et temps rituel dans le Veda et l'exégèse brahmanique*, les mardis de 14 h. à 16 h. - 2. *Lecture du* Satapatha-Brahmana, les mercredis de 10 h. à 12 h. (au C.E.I.A.S., 54 Bd Raspail, 75006 Paris).

Chargée de conférences : **Mme Lyne BANSAT-BOUDON**
Le rite, le théâtre et l'ordre du monde : lectures du Natyasastra, les 2è et 4è mercredis de chaque mois de 14 h. à 16 h.

Directeur d'études : **Mme Marie-Louise REINICHE**
1. *Les relations du religieux et du politique et leurs évolutions dans le monde indien : problèmes anthropologiques et perspective comparative (suite)*, les jeudis de 16 h. à 18 h. - 2. *Éthnologie et sociologie de l'hindouisme*, jour et horaire à fixer.

Directeur d'études invité : **M. Johannes BRONKHORST**
Les sujets, jours et heures seront précisés ultérieurement.

RELIGIONS DE L'IRAN ANCIEN

Directeur d'études : **M. Philippe GIGNOUX**
1. *Analyse d'ouvrages récents sur le Zoroastrisme.* - 2. *Explication du* Dâdestân î Mênôg î xrad *(suite)*, les mardis de 9 h. à 12 h.

Chargé de conférences : **M. Frantz GRENET**
Documents sur l'histoire du zoroastrisme en Asie centrale, les jeudis de 15 h. à 17 h.

Directeur d'études invité : **M. Prods SKJAERVO**
Les sujets, jours et heures seront précisés ultérieurement.

RELIGIONS DU PROCHE ORIENT SÉMITIQUE ANCIEN

Directeur d'études : **Mme Hedwige ROUILLARD-BONRAISIN**
1. *Annales, histoire et historiographie.* - 2. *Étude du livre de Daniel*, les mardis de 13 h. à 15 h.

THÉOLOGIE MUSULMANE

Directeur d'études : **M. Daniel GIMARET**

1. *Lecture de textes*, les mercredis de 9 h. à 10 h. - 2. *Dieu à l'image de l'homme : les anthropomorphismes de la* sunna *et leur interprétation par les théologiens* (suite et fin), les vendredis de 14 h. à 15 h.

HISTOIRE DES PHILOSOPHIES EN ISLAM

Directeur d'études : **M. Pierre LORY**

La folie et ses raisons selon la pensée musulmane médiévale, les mercredis de 9 h. 30 à 11 h. 30 [les cours ont lieu 12 place du Panthéon, deuxième étage, dans la Salle du Droit musulman].

Chargé de conférences : **M. Abdellah BOUNFOUR**

L'exégèse coranique : penser la genèse, les jours et heures seront précisés ultérieurement.

ANTHROPOLOGIE RELIGIEUSE DU MONDE MUSULMAN

Maître de conférences : **Mme Denise AIGLE**

1. *Transmission du savoir et institutiosn religieuses : Damas du XIè au XIIIè siècle*, les 1er et 3è (et 5è) lundis de 13 h. à 15 h. - 2. *Les saints hommes du Fars médiéval : itinéraires personnels et place dans la société*, les 2è et 4è lundis de 13 h. à 15 h.

Chargé de conférences : **M. Mohamad LACHHAB**

Etude de textes religieux médiévaux en arabe, les 2è et 4è mardis de 16 h. à 18 h.

GNOSE ET MANICHÉISME

Directeur d'études : **M. Jean-Daniel DUBOIS**

1. - *L'*Apocalypse de Pierre *(Nag Hammadi VII, 3) : la vision de la croix* (1er semestre) ; *Recherches sur l'*Évangile *copte de* Thomas (2è semestre) (en collaboration avec **M. Pierre GEOLTRAIN**), les mardis de 16 h. à 17 h. - 2. *Hymnologie manichéenne : traduction commentée des derniers* Psaumes à Jésus *du psautier copte de Dublin*, les mardis de 17 h. à 18 h.

CHRISTIANISMES ORIENTAUX

Maître de conférences : **Mlle Marie-Joseph PIERRE**

1. *Les* Odes de Salomon *: lecture et commentaire du texte syriaque et des fragments coptes (suite).* - 2. *Étude du* Commentaire du Diatessaron *d'Éphrem*, les mardis de 9 h. à 11 h.

RELIGIONS TIBÉTAINES

Mme Anne-Marie BLONDEAU, directeur d'études. - *Entraînement à la lecture et commentaire de textes religieux* (travaux dirigés ; niveau moyen en langue tibétaine exigé), les jeudis de 10 h. à 11 h.

BOUDDHISME JAPONAIS

M. Jean-Noël ROBERT , directeur d'études. - *Initiation au sino-japonais* (Kanbun) et *lecture de textes bouddhiques* (il est nécessaire d'avoir un bon niveau de japonais moderne), les mardis de 18 h. à 20 h.

RELIGION ASSYRO-BABYLONIENNE

M. Daniel ARNAUD, directeur d'études. - *La religion des Syriens à l'âge du Bronze récent (XIV^è^-XIII^è^ siècles) : Ras Shamra et Meskéné*, les mercredis de 9 h. à 10 h.

新 刊 紹 介

『故鄺慶欽追悼中国文化史論集』

Hommage à Kwong Hing Foon: Études d'histoire culturelle de la Chine, Jean-Pierre DIÉNY éd., Bibliothèque de l'Institut des Hautes Études Chinoises, vol.XXX, 1995, viii-288p., 8pl.

本書は1990年7月に急逝された香港出身の中国文学研究者鄺慶欽女史の追悼論集である。女史はパリ大学中国学高等研究所でJ.-P.ディエニ氏に師事され、王昭君変文の研究により文学博士の学位を得られた(*Wang Zhaojun: Une héroïne chinoise de l'histoire à la légende*, Mémoires de l'Institut des Hautes Études Chinoises, vol. XXVII, Paris 1986, vi-479pp., XXIpl.)。その後、フランス国立学術研究センター(CNRS)の研究員となられ、K.シペール氏と『雲笈七籤索引』を共編された (Kristofer SCHIPPER, *Index du Yunji qiqian*, 2vols., École Française d'Extrême-Orient, 1982)。この間に王昭君戯の研究を継続され、『通報』等に論文を発表されていた ("L'évolution du théâtre populaire depuis les Ming Jusqu'à nos jours: le cas de Wang Zhaojun", *T'oung pao*, LXXVII/4-5, 1991, pp.177-225)。邦訳された論文には以下のものがある。遊佐昇訳「中国伝統戯中の王昭君戯 — 民俗研究資料の一例」(酒井忠夫, 福井文雅, 山田利明編『日本・中国の宗教文化の研究』平河出版社 1991, pp.195-212)。なお、女史の研究者としての経歴については以下の追悼文を参照されたい。Jean-Pierre DIÉNY, "In memorian: Kwong Hing Foon", *Études chinoises*, X/1, 1990, pp.259-261.

収録論文は以下のとおりである。

SHUM Wing-fong, "Une enquête de Kwong Hing Foon sur le personnage de Wang Zhaojun", pp.1-13. 「生への聞取り調査」(鄺慶欽氏による王昭君についての中国人大学

Alain THOTE, "De quelques décors au serpent sur les bronzes rituels du royaume de Chu", pp.15-42.
(東周青銅器の蛇の文様、その地域分布と起源)

Jean LEVY, "Sima Qian, Han Wudi et l'éternité", pp.43-75.

(司馬遷と武帝と「永世」—『史記』撰述の意図)
Jean-Pierre DIÉNY, "Portraits de femmes. Le chapitre XIX du *Shishuo xinyu*", pp.77-113.
(『世説新語』「賢媛篇」の三十二人の女性群像)
Donald HOLZMAN, "Xie Lingyun et les paysans de Yongjia", pp.115-127.
(謝霊運の詩に描かれた浙江省永嘉の農民たち)
Catherine DESPEUX, "L'expiration des six souffles d'après les sources du Canon taoïque. Un procédé classique du *qigong*", pp.129-163.
(道教経典に見る古典的気功「六気法」の行法)
Pauline Bentley KOFFLER, "The Story of the Magic Mirror (*Gujing ji*) by Wang Du. Translated with an Introduction and Notes", pp.165-214.
(鏡の神秘を語る唐初期の王度『古鏡記』訳注)
HO Kin Chung, "Métamorphoses d'une figure mythologique: Erlang shen", pp.215-238.
(二郎神伝説の生成と変容、およびその図像)
Carolins GYSS-VERMANDE, "Lettres de Song Huizong au maître du Maoshan Liu Hunkang, ou le patronage impérial comme pratique de dévotion", pp.239-253.
(『茅山志』所載の道士劉混康宛の徽宗の尺牘)
Kristofer SCHIPPER, "Note sur l'histoire du Dongyue miao de Pékin", pp.255-269.
(北京東嶽廟の創建と沿革に関する史料の検討)
John LAGERWEY, "Corps et âme en Chine et en Occident, ou à quoi sert la sinologie? Réflexions suscitées par *L'art chinois de l'écriture* de Jean-François Billeter", pp.271-284.
(中国書芸術を創造する主体としての身体と心)

イザベル・ロビネ『道教の内丹序説』
Isabelle ROBINET, *Introduction à l'archimie intérieure taoïste, De l'unité et de la multiplicité. avec une traduction commenté des Versets de l'éveil à la vérité*, Éditions du Cerf, Paris 1995, 276pp.

錬金術は中国において長い歴史を持っている。人々は腐敗することのない金を服用することにより、すなわち一種の類感呪術にもとづいて、不滅の肉体を獲得しようとした。このような不老不死の探究は神仙思想にとって究極の目標であり、したがって、それをひとつの母体として成立した道教とも錬金術は分ちがたく結びついたのである。

そこでは水銀化合物である丹砂を主原料とし、化学反応によって純粋な金を練成する方法が考え出された。これはあたかも実験室の中で練丹炉を用いて行なう作業であったが、これとは別に、人体そのものを炉に見立て、陰陽の気の操作を通じて丹を得ようとする体内の錬丹術、すなわち内丹が唐代から盛んに行なわれるようになった。これは薬物を一切用いず、もっぱら心身の鍛練に依存する方法であり、現代に生きる気功はこの内丹の系統に連なるものと考えられている。

ロビネ氏の研究は、内丹の基礎となっている精神と身体の修養という、この思索的かつ生理的な営みの根源を、漢代に複雑な展開をとげた陰陽五行説に遡って捉えようとする試みである。そこでは内丹の思想が、宇宙の根源である太極（すなわち「一」）を頂点とする形而上学的な体系の中で把握される。このように本書においては、唐代に普及した内丹の思想的基盤が漢代以前から説き起こされ、道教（とりわけロビネ氏の得意とされる上清派）の教義の展開に呼応して、既に六朝時代において内丹の萌芽とも言うべき思想の追及がなされていたことが明らかにされる。その後は、宋代に禅宗の思想と相まって（あるいは対立して）精神と身体いずれもの修養が「性命双修」として説かれるに至るまでの歩みがたどられる。最後に内丹の理論的達成である北宋末の道士張伯端による『悟真篇』について、現存する注釈本の中から『紫陽真人悟真篇三註』五巻（道蔵142）が訳出されている。

著者のロビネ氏は、パリ大学高等研究院で

カルタンマルク（Max KALTENMARK）に師事され、現在はエクス・マルセイユ大学教授として中国文化史講座を担当しておられる。フランスを代表する道教研究者の一人である（詳しい紹介は以下を参照されたい。福井文雅『欧米の東洋学と比較論』隆文館1991, p.45sq.; 坂出祥伸『東西シノロジー事情』東方書店 1994, p.216sq.)。

著書には次のものがある。『唐初期までの老子道徳経の注釈』(*Les commentaires du Tao tö king jusqu'au VIIe siècle*, Mémoires de l'Institut des Hautes Études Chinoises, vol.V, 1977, réimpr. 1981)、上清派の存思を扱った『道教の瞑想術』(*Méditation taoïste*, Dervy Livres, 1979; Albin Michel, 1995)、学位論文『道教史における上清派の神授』(*La révélation du Shangqing dans l'histoire du taoïsme*, 2vols., École Française d'Extrême-Orient, 1984. 同書については以下に詳細な紹介がなされている。山田利明「欧米地域における道教研究の現状」秋月観暎編『道教研究のすすめ』平河出版社1986, p.263sq.)、さらに老荘の時代から宋元に至る『道教の歴史』(*Histoire du taoïsme des origines au XIVe siècle*, Éditions du Cerf, 1991)がある。そこでは宋元時代における内丹理論の確立までが扱われており、ロビネ氏はこれをもって中国道教のひとつの到達点と考えられたのではなかろうか。このたび出版された『内丹序説』は、そのような問題意識をさらに発展深化させた研究の成果であると言うことができよう。

本書は、現在ジュネーブ大学古典語東洋語学科講師を務めるジュフェレ氏の学位論文で、後漢の王充に関する思想史的研究である。

全体は三部に分れ、第一部「序論」においては、はじめに時代背景と漢代思想史が概観され、続いて王充の生涯および『論衡』を中心とする彼の著述についての分析がなされる。第二部では『論衡』本文より「逢遇」、「感虚」、「譴告」、「実知」、「対作」、「自紀」の各篇が訳出される。続く第三部「研究篇」では、以上の成果を踏まえた上で再び漢代思想史の流れの中に『論衡』に示された王充の思想が位置づけられ、その独自性が解明される。ジュフェレ氏によれば、王充の思想は従来言われているような進歩的な点にその本質があるのではなく、むしろそれは漢代の他の思想家と異なるところなく、尚古的とも言えるほどに儒教の枠内において政治と社会を志向したものであるという。そのことを確認した上で、それでは王充の思想の特質はどこにあるのかと言えば、それはあくまで自らの経験に立脚した個人的精神と、それをもとに虚妄を排撃しようとする批判的精神にあって、それらはしかし新しい思想を導くものとしてよりは、かえって漢代の思想のたどるべき到達点として捉え得るものであるという結論が示されている。

欧米における『論衡』の訳注および研究としては、Alfred FORKE, *Lun-heng*, 2vols., London 1907; Timoteus POKORA, *Kriticka pojednani (Lun-cheng), Vybor z dila cinskeho filosofa I stol*, Praha 1971.の二書があり、本書はこれらに続く本格的な研究書と言うことができよう。

ニコラ・ジュフェレ『王充の思想研究』
Nicolas ZUFFEREY, *Wang Chong (27-97?); Connaissance, politique et vérité en Chine ancienne*, Schweizer Asiatische Studien, Monographien Bd. XIX, Peter Lang, Bern 1995, 440pp.

［雑誌目次］

Journal asiatique, t.CCLXXXIII, no.1, 1995.

Joseph CHELHOD, "Les Portugais au Yémen d'après les sources arabes", pp.1-18.「メン攻略)

(16世紀アラブ史料によるポルトガル人のイエ
Jean KELLENS, "L'âme entre le cadavre et le paradis", pp.19-56.
(ゾロアスター教における死後の魂の行方)
Eric PIRART, "Les noms des Perses", pp.57-68.
(ペルシャ人を表す種々の名称とその語源)
Christian BOUY, "Matériaux pour servir aux études upaniṣadiques (III). La *Mudgalopaniṣad*", pp.69-89. 「ニシャッド)
(ウパニシャッド研究史料(3) —ムドガラ・ウパ
Marcelle SAINDON, "Le *Pitṛkalpa* du *Harivaṃśa* et le concept de Pitṛ", pp.91-120.
(『ハリヴァンシャ』に見るピトリ神の起源)
Rolf A. STEIN, "La soumission de Rudra et autres contes tantriques", pp.121-160.
(タントラ文献に描かれた邪神ルドラの降伏)
Samten G. KARMAY, "Les dieux des terroirs et les genévriers: un rituel tibétain de purification", pp.161-207.
(祖先神と杜松の実 — チベットの清めの儀式)
Kamaleswar BHATTACHARYA, "Notes lexicographiques sur les inscriptions du Cambodge", pp.209-212.
(カンボジア碑文の語彙研究への補遺数題)
ANG Chouléan, "Le sol et l'ancêtres. L'amorphe et l'anthropomorphe", pp.213-238.
(大地と祖先 — 人の姿に似せたクメールの神)
Philippe LE FAILLER, "Le 'coût social' de l'opium au Vietnam. La problématique des drogues dans le philtre de l'histoire", pp.239-264.
(仏領下ヴェトナムの阿片による社会的損失)

Journal asiatique, t.CCLXXXIII, n° 2, 1995.

Jean KELLENS, "Interrogation", pp.271-274.
(アフラ・マズダへの呼びかけの一語への疑問)
Mohammad MOKRI, "De la distinction des différents groupe d'hommes et de leur attitudes (*Dawra-y gurûh-gurûh*)", pp.275-350.
(アフレハック聖典が語る善人と悪人の諸段階)
Daniel BALLAND, "Du mythe à l'histoire: Aux origines du chi'isme chez les Paštun", pp.351-372.
(スンニ派パシュトウ族中のシーア派起源神話)
Kamaleswar BHATTACHARYA, "Le *Siddhānta-laksanaprakarana* du *Tattvacintāmaṇi* de Gaṅgeśa avec la *Dīdhiti* de Raghunātha Śiromaṇi et la *Ṭīkā* de Jagadīśa Takālaṃkāra (suite). Texte traduit et commenté", pp.373-406.
(ガンゲシャの推理論書に対する諸注釈の訳注)
Étienne TIFFOU et Richard PARTY, "La notion de pluralité verbale: le cas du bourouchaski du Yasin", pp.407-444. 「の欠如)
(カシュミールの一言語における動詞複数活用
Véronique BOUILLIER, "Du bon usage des brahmanes: les Bâhun et l'État népalais", pp.445-468.
(バラモン階級とネパール近代国家の建設)
Catherine RAYMOND, "Étude des relations religieuses entre le Sri Lanka et l'Arakan du XIIe au XVIIIe siècle: documentation historique et évidences archéologiques", pp.469-501.
(スリランカとミャンマー間の上座部仏教の交渉)

T'oung pao, vol.LXXXI, fasc.1-3, 1995.

[論文]
Anne Behnke KINNEY, "The Theme of the Precocious Child in Early Chinese Literature", pp.1-24.
(古代中国文学に描かれた「早熟な子供」の意味)
Michael NYLAN, "The *ku wen Documents* in Han Times", pp.25-50.
(漢代の文献に見られる『古文尚書』への言及)
Anne E. McLAREN, "Ming Audiences and Vernacular Hermeneutics: The Uses of the *Romance of the Three Kingdoms*", pp.51-80.
(明代通俗小説の享受 —『三国演義』を例に)
CHAN Hing-ho, "Un recueil de contes retrouvé après trois cents ans: le *Xing shi yan*", pp.81-107.

(奎章閣文庫発見の明代教訓説話集『型世言』)
Robert B. MARKS and CHEN Chun-sheng, "Price Inflation and its Social, Ecomonic, and Climatic Context in Guangdong Province, 1707-1800", pp.109-152.
(清朝前期の広東省における貨幣価値の暴落)
André LÉVY, "À propos de Cendrillon en Chine", pp.153-164.
(唐代におけるシンデレラの説話とその起源)

[書評]
- Anne Behnke KINNEY, *The Art of the Han Essay: Wang Fu's Ch'ien fu lun* (Arizona State University, 1990), par R. P. KRAMERS, p.165sq.,
- Wang SHIFU, *The Moon and the Zither: the Story of the Western Wing* (University of California Press, 1991), par André LÉVY, pp.166-170.
- Felicitas SCHMIEDER, *Europa und die Fremden: Die Mongolen im Urteil des Abendlandes vom 13. bis in das 15. Jahrhundert* (Jan Thorbecke Verlag, Sigmaringen 1994), par Morris ROSSABI, p.170sq.
- Margareta GRIEßLER (Hrsg.), *Die "Geschichte der höchst bemerkenswerten Dinge und Sitten im chinesischen Königreich" des Juan Gonzalez de Mendoza. Ein Beitrag zur Kulturgeschichte des Ming-zeitlichen China* (Jan Thorbecke, 1992), par Ad DUDINK, pp.171-192.
- John Robert SHEPHERD, *Statecraft and Political Economy on the Taiwan Frontier 1600-1800* (Stanford University Press, 1993), par R. Bin WONG, pp.192-194.
- LI Wai-yee, *Enchantment and Disenchantment, Love and Illusion in Chinese Literature* (Princeton University Press, 1993), par Wilt IDEMA, pp.195-200.

T'oung pao, vol. LXXXI, fasc.4-5, 1995.

[論文]
K. E. BRASHIER, "Longevity like Metal and Stone: The Role of the Mirror in Han Burials", pp.201-229.
(漢代に埋葬された鏡—「金石の如き壽」の象徴)
KUO Li-ying, "La récitation des noms de Buddha en Chine et au Japon", pp.230-268.
(中国と日本における仏名経類の読誦と法会)
LI Wai-yee, "The Collector, the Connaisseur, and Late-Ming Sensibility", pp.269-302.
(蒐集家と鑑識家 — 後期明人の事物への偏執)
N. GOLVERS, "A Chinese Imitation of a Flemish Allegorical Picture Representing the Muses of European Sciences", pp.303-314.
(フランドルの寓意画「学芸の神」の中国版模写)
André LÉVY, "Du pareil au même: À propos des "trois mots" du *Shishuo xinyu*, IV, 18", pp.315-319.
(『世説新語』に言う三語掾「将無同」の意味)
André LÉVY, "Un vieil instrument de détection: Le nerf de loup", pp.320-327.
(『金瓶梅』に出る古えの盗人発見器「狼筋」)
Laurent SAGART, "Chinese "Buy" and "Sell" and the Direction of Borrowings between Chinese and Hmong-Mien: A Response to Haudricourt and Strecker", pp.328-342.
(「賣」「買」等の語は中国起源か苗瑤族起源か?)

[書評]
- Anne BIRELL, *Chinese Mythology: An Introduction* (The Johns Hopkins University Press, 1993), par Rémi MATHIEU, pp.343-346.
- Richard E. STRASSBERG (transl.), *Inscribed Landscapes: Travel Writing from Imperial China* (University of California Press, 1994), par Martine VALLETTE-HÉMERY, pp.346-348.
- Kathryn Ann TSAI (transl.), *Lives of the Nuns: Biographies of Chinese Buddhist Nuns from the Fourth to Sixth Centuries* (University of Hawaii Press, 1994), par V. GEORGIEVA, pp.348-351.
- Suzanne E. CAHILL, *Transcendense and Divine Passion: The Queen Mother of the West in Medieval China* (Stanford University Press, 1993), par

Robert L. CHARD, pp.352-355.
- Richard M. W. HO, *Ch'en Tzu-ang: Innovator in T'ang Poetry* (The Chinese University Press, Hong Kong 1993), par Donald HOLZMAN, pp. 352-360.
- Peter K. BOL, *"This Culture of Ours": Intellectual Transitions in T'ang and Sung China* (Stanford University Press, 1992), par Michael LACKNER, pp.360-366.
- Robert P. HYMES and Conrad SCHIROKAUER (eds.), *Ordering the World: Approaches to State and Society in Sung Dynasty China* (University of California Press, 1993), par Winston W. LO, pp.366-371.
- Kathlyn Maurean LISCOMB, *Learning from Mount Hua: A Chinese Physician's Illustrated Travel Record and Painting Theory* (Cambridge University Press, 1933), par ZHANG Hongxing, pp.371-376.

Cahiers d'Extrême-Asie, t.VIII, 1995.
Mémorial Anna Seidel: Religions traditionnelles d'Asie orientale (I)
<東アジアの伝統的諸宗教>アンナ・ザイデル追悼論集
Hubert DURT, "A nos lecteurs /To our readers", pp.v-xxi.
(序文) A.ザイデル書誌と追悼記事一覧を付載
Anna SEIDEL (trad. par Farzeen BALDRIAN-HUSSEIN), "Taoïsme: Religion non-officielle de la Chine", pp.1-39.
(道教 — 中国民衆の宗教) id., *Taoismus, die inoffizielle Hochreligion Chinas*, Deutsche Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens, Tōkyo 1990, 81SS. のフランス語訳
Albert E. DIEN, "Instructions for the Grave: The Case of Yan Zhitui", pp.41-58.
(墓に入れておく契約書—『顔氏家訓』を例に)
Valerie HANSEN, "Why Bury Contracts in Tombs?", pp.59-66.
(アスターナ出土の棺の中の埋葬契約書)
James M. HARGETT, "Li Bo (701-762) and Mount Emei", pp.67-85.
(李白と峨眉山 — 詩にうたわれた仙山)
John LAGERWAY, "Taoist Ritual Space and Dynastic Legitimacy", pp.87-94.
(道教の儀礼空間と王朝儀礼の伝統の継承)
LIN Fu-shih, "Religious Taoism and Dreams: An Analysis of the Dream-data Collected in the *Yün-chi ch'i-ch'ien*", pp.95-112.
(道教と夢—『雲笈七籤』に語られた夢の分析)
Valérie MALENFER-ORTIZ, "Rêverie picturale pour moines bouddhistes *chan* et lettrés chinois sous les Song du Sud (1127-1279), pp.113-134, 5fig.
(南宋の禅僧・文人にとっての画中の夢の世界)
Charles D. ORZECH, "A Buddhist Image of (Im) Perfect Rule in Fifth-Century China, pp.139-153.
(『仁王般若経』に見る終末の観念と仏法の世)
Fabrizio PREGADIO, "The Representation of Time in the *Zhouyi Cantong Qi*", pp.155-173.
(『周易参同契』の説く陰陽消息と道教の錬丹)
Isabelle ROBINET, "Un, deux, trois — Les différentes modalités de l'Un et sa dynamique", pp. 175-220.
(「一」なる太極と多様なる「二」と「三」の生成)
James ROBSON, "The Polymorphous Space of the Couthern Marchmount [Nanyue]", pp.221-164.
(南嶽衡山の歴史とそれをめぐる道仏交渉)
Franciscus VERELLEN, "The Beyond Within: Grotto-Heavens (*dongtian*) in Taoist Ritual and Cosmology", pp.265-290, 1pl.
(道教儀礼と世界認識の中の「内なる彼方」洞天)
Antonio GUERREIRO, "Cosmology, Rituals and Society: Preliminary Observations on the Religious Creeds and Practices in Iriomote-jima", pp.291-323.
(西表島の信仰・儀礼・社会に関する予備的調査)
Gail Chin BRYANT, "The *Mukaekō* of Taimadera:

A Case of Salvation Re-enacted", pp.325-334.
(当麻寺の「迎講」— 救済の再演)
Bernard FAURE, "Quand l'habit fait le moine: The Symbolism of the *kāṣāya* in Chan /Zen Buddhism", pp.335-369.
(曹洞禅における袈裟の象徴的な意味)
Harriet HUNTER, "The *Rishukyō Mandara* Said to have Been Introduced by Shūei", pp.371-388.
(伝宗叡請来の醍醐寺本「理趣経曼荼羅」)
Livia KOHN, "Taoism in Japan: Positions and Evaluations", pp.389-412.
(日本における道教の受容 — 回顧と展望)
Mieko MACÉ , "La médecine d'Ishizaka Sōtetsu en tant que modèle culturel de l'époque d'Edo", pp.413-438, 2pl.
(江戸文化の一典型としての石坂宗哲の医学)
Charlotte von VERSCHUER, "Le Japon, contrée du Penglai? —Note sur le mercure", pp.439-452.
(蓬莱の島日本—錬丹の水銀に関する考察)

菊地章太

『敦煌から日本へ』
DE DUNHUANG AU JAPON
Etudes chinoises et bouddhiques offertes à Michel Soymié

Textes réunis par Jean-Pierre Drège
Librairie Droz S.A., Genève, 1996

ミッシェル・スワミエ教授に献呈された論集は、副題が「中国研究と仏教研究」であり、次の17人の寄稿から成り、次のような構成である。（副題は原則として割愛）

前書　　ジャン＝ピエール・ドレージュ
〔寄稿すべてについて簡潔な紹介を付している。〕
スワミエ教授主要著作一覧
H. デュルト　摩訶摩耶經と佛母經に見える佛陀涅槃後の母への出現
E. トロンベール　敦煌の寺院帳簿から見た二月八日の祭り
F. ワン・トゥタン　春の聖なるもの —二月八日の仏教祭祀
D. エリアスベルク　貧困な僧達の嘆き節
P. マニャン　仏陀への寄進者と賭博者達
R. シュネデール　敦煌文書中の経典の欠損写本
J.-P. ドレージュ　蝴蝶装と旋風葉子
張廣達　敦煌とトゥルファン文書に見える公式令
S. フランツィーニ　敦煌暦日による漢語の日付の形成
山口瑞鳳　ダルマ王破仏の虚構
呉其　昱　敦煌のヘブライ写本
J. ジェルネ　動物への憐れみ
L. ヴァンデルメルシュ　近代仏教の一仏教観 —熊十力の新認識論
J.-P. ディエニ　曹操の或る戦い
G. ガニョン　『史通』における劉知幾の自跋
興膳　宏　陸機の文賦
福井文雅　日本における天皇号の採用について

M. ブッソッティ, J.-P. ドレージュ　敦煌研究文献目録（稿） —欧米語篇—

山口論文（英文）を除き、他は全て仏文である。この論集刊行には長い時間がかかっていて、その間には、イザベル・アン Isabelle Ang. アラン・アロー Alain Arrault 両氏の献身的努力と、シュネデール、エリアスベルグ、ディエニ、トロンベール、マルタン François Martin 各位の協力があった。各氏への謝辞が表紙裏に出ている。

彙　報

パリーソルボンヌ「大学院」新設の極東学科

フランスに幾ら東洋学が盛んであるとは言っても、フランス文化論とかギリシア、ラテンと言ったヨーロッパの正統文化の講義・研究に及ぶものではない。日本でも、幾ら東洋学が盛んになっても、通常の大学では、日本文学科にとって代わるとは考え難いのと同様である。

そこで、フランスで東洋学、特に中国・日本の勉強に志す学生は、或る程度に進むと、一昔前までは、ソルボンヌには中国・日本の学科は無いので、関連の研究所又は「高等研究院」E.P.H.E.に進んで、ゼミの授業を受けるしかなかった。しかし、このE.P.H.E.はパリ大学（所謂ソルボンヌ）の二階を言わば間借りしているのであって、ソルボンヌそのものではない。

学制でも大きな相違があって、例えば前者では入試は無いが、後者では日本の入試に相当する国家試験がある。

高等研究院の教授は、正式には directeur d'études（研究指導者）と呼ばれて professeurではない。それに対して、パリ大学の教授はプロフェッサーである。この違いは、前者は博士号無しでも成れるが、後者は博士号が無ければ成れない点に在る。パリ大学（ソルボンヌ）には一貫した中国・日本の学科は無かったので、中国・日本に関しての博士号は出しようが無かったのであろう。

度々の学制改革によって、かつての「ランゲゾ Langues O.（東洋語学校）」も大学に成りINALCO（イナルコ）の名称に変ったが、これ又歴史的に見ればソルボンヌではない。

つまり、日本人にとって馴染みの深いソルボンヌ（パリ大学文学部。今では、具名では Université Paris-Sorbonne, Paris IV パリ・ソルボンヌ大学第四校）でも、大学院レベルでは、極東研究で高等研究院やINALCOに一籌を輸す面があったのである。

コレージュ・ド・フランスは日本には無い機関であって、いわば高度の公開講演会である。従って学生の登録も試験も無く、教育の面でソルボンヌその他と連携は無い。(1)

ところが、近年1988年に、パリ大学ソルボンヌの「大学院コースMaîtrise, D.E.A.」に、極東、中国・日本に関する学科が創設されたのである。

創設者であり現在の主任でもあるのは、フロラ・ブランション教授Mme Flora Blanchonである。

講義要項によると、「エジプト学」（エジプトの歴史の諸問題）「碑銘金石学」（エジプトの碑銘金石学：古代・中期帝国の文書）「古代ギリシア」（ギリシア考古学：古代ギリシアの学芸、ギリシア考古学の諸問題）等々から始まって、主として美術史・考古学とその研究方法に関する講座が続き、「極東」（中国、日本の他、東インド、インドの寺院研究等）「古美術復元の理論」「考古学と美術史の為の測定・陳列法」「考古学と美術史の為のマイクロ・コンピューター（その理論と実際）」等々の学科が続いてある。

また、「ギリシア・ローマ文化総論」「ギリシア語又はラテン語入門（2ème niveau）」の他に「ギリシア古銭学」「ローマ史」など5種類の選択科目が作られた。その他、学生要項には、「歴史概説」と「研究入門ゼミナール」とを選ぶように、との追記がある。

この「極東」学科は、高等研究院の「歴史・言語部門」と単位の相互互換が可能のように大学院学生要項では読み取れたが、実情は未詳の点が多い。前述のように、高等研究院では教授は「研究指導者」と呼ばれ、パリ大学ではプロフェッサーであるように、両者は何かと違うからである。

新設とは言え、パリ大学ーソルボンヌ「大

学院・極東」部門にも若手が揃っている。東洋研究で双方がライバルに将来成ることは必至であろう。フランス版の「宗家」「本家」の争いが起こるであろうか。

（註1） 詳しくは拙著『欧米の東洋学と比較論』（隆文館. 1991）を参看頂ければ幸甚である。　　— 福井文雅 —

会 員 情 報

福井文雅 —

① 今年11月25日から朝 9時30分から11時15分位まで、月曜日毎で３回、パリ大学ソルボンヌ（第４校）Université de Paris-Sorbonne, Paris IV の Maîtrise, D.E.A. （大学院コース）で講義を行いました。

それは、学科 Extrême-Orient「極東」（別項参照）のICONOGRAPHIE ET RELIGION EN EXTREME-ORIENT 〔図像学と極東の宗教〕に在る新設講座 Structures du bouddhisme chinois et japonais（ 中国仏教と日本仏教との構造）, *Structure et influence du bouddhisme sur la civilisation chinoise*（副題 :仏教の構造と、中国文明に及ぼした仏教の諸影響）でした。

この大学院の講義は春に日本から到着した後に頼まれたもので、「他に約束もあり、サバティカルで滞在中でもあり、講義は出来ない」と断っても断りきれず、前期全部と言うのを３回だけで勘弁して頂いたものです。唯、ソルボンヌ大学院の新学年要項には、通年で私の名前と講義題目とが載っています。私の後は、親友J.-N. Robert教授と、中国人に嫁したFrançoise Wang-Toutain教授とで分担講義して下さる予定です。

教室はパリ・ソルボンヌ奥の Esc.I（イ階段）の二階、Bibliothèque d'Histoire des Religions （宗教史図書室）奥にありました。rue Cujas を見下ろす二階です。広さは、高等研究院 E.P.H.E. のよりも大きく、坐り方によっては、約50人ぐらいは受容可能です。

私への受講者は約２０名。教室一杯に円形に坐り、教授と大学院生と、外部から来たかなり年配の聴講生達でした。

講義では、漢訳仏典については異訳や対応する原典と、儒家特有の術語では欧米語表現と、道教の場合では台湾での生きた姿と、というように「比較対照」して話を進めました。

フランス語の講義では内容が圧縮されますから、３回でも日本語での６回分ぐらいに匹敵します。それに、中文の解説を中心とする講義では、「何だ、日本人相手と同じか」と後で何を言われるか判りませんので、フランス文化・文学への言及・比較にも留意しました。ですから、前期全部を引受けていたのでは、帰国まで講義の準備に明け暮れねばならなかったでしょう。３回だけで無理やり止めさせて貰って良かった、と今ホッとしています。

唯、ゼミではなくて講義でしたから、１時間40分くらい専ら喋り続けて飽きさせないのには、工夫が要りました。日本から磬や中啓などの法具を持って来れば良かったのに、と後悔したのはその時です。Hergé, *Tintin au Tibet*（ タンタン、チベットへ行く）を引用して、受講生からドッと笑いが起こりました。フランスでは老若を問わず、テレビと漫画で有名なのです。

② １月中に高等研究院 E.P.H.E. 宗教学部門で、シペール K.M.Schipper 教授の依頼で「道教研究の現在の諸問題」を話すことになりました。1963年12月に父がパリに来遊した時は Demiéville 先生の依頼で、「道教研究の基礎的諸問題」を、パリ大学中国学高等研究所（当時はソルボンヌの地下）で講演し、私が通訳をしたことがあります。思えば今から33年前のことながら、同じ冬のことでした。私がすることになって、感慨ひとしおです。

③　フランス人を招待するのに Club de la Sorbonne（ソルボンヌ・クラブ）を良く使っています。この存在は意外に（フランス人でも他大学、他機関の教員達には）知られていないようです。従って、普通のレストランへ招待するよりも喜ばれる場合がありました。

そこの値段やパリ大大学院の講師料のことなど（パリ大で講義をされた方は別として）余り日本には知られていないようですので、機会を見て御報告したいと思っています。

スワミエ教授記念論文集出版記念会

11月13日（水）午後5 時から、カルジナール・ルモワーヌの中国研究所において、スワミエ教授献呈論集出版記念レセプションが開催され、同僚や受業生など、同教授所縁の人々が多数参集した。主催者を代表して Ecole Pratique des Hautes Etudes に於けるスワミエ教授の後継者であるジャン＝ピェール・ドレージュ教授から、スワミエ教授の業績が敦煌研究班での活動を中心に紹介された後、来賓を代表して、コレージュ・ド・フランス名誉教授ジャック・ジェルネ氏が、スワミエ教授との長い交遊のエピソードを交えながら、同教授の長年にわたる功績を称えた。それらをうけて、スワミエ教授から答礼のスピーチがあり、時折メモに目をやりながら感慨深げに、学究生活の思い出を語られた。生まじめな同教授の人柄のよく出たスピーチであった。その後、参会者一同、スワミエ教授夫妻を囲んで、晩秋の夕べをしばし歓談に時を移した。日本の学界からは、論集の執筆者でもある福井文雅と興膳宏が参席した。1996年12月4 日パリの寓居にて記す。（興膳　宏）

ＩＣＡＮＡＳ
（国際アジア・アフリカ研究会議）

第35回国際アジア・北アフリカ研究会議が今年7 月7 日から12日まで、ハンガリーのブダペストで開催される。総合テーマは「20世紀における学術の到達点」。本学会の関係では、福井文雅教授が責任者となってシンポジゥム「日本人研究者からみた中国宗教研究の現状と展望」を行う予定。パネラーは6 人。いずれも日本人研究者があたり、主に中国仏教・道教研究の現状と将来の展望を討論する。使用言語は英語。現在、パネラーを中心に研究会を開いて準備にあたっている。

叙勲　楠山早大名誉教授勲三等
エライユ女史勲四等

平成８年秋の叙勲において、本学会会員の楠山春樹早稲田大学名誉教授は、勲三等に叙せられた。また、先年、片山蟠桃賞をうけたフランスの日本文化研究の第一人者フランソワ・エライユ女史も勲四等に叙せられた。共にその栄誉をお祝いしたい。

福井教授・興膳教授フランスで講義

本年度早稲田大学の在外研究員として滞仏中の福井文雅早大教授は、12月から１月までパリ大学大学院で講義を担当。興膳宏京大教授も11月から12月にかけて、コレージュ・ド・フランスで、中国の文学理論についての４回の講義を行った。

日仏会館で故フランク博士の追悼会

昨年秋逝去された元日仏会館フランス学長

・日本学士院客員ベルナール・フランク博士の追悼会が、ウーヴリュー駐日フランス大使参席のもと、12月19日日仏会館大ホールで催された。年末にもかかわらず多数の参会者があり、今更ながら博士の人柄がしのばれた。式後、レセプションルームで献盃が行われ、それぞれに博士の思い出を語った。

第17期日本学術会議学術団体に登録

昨年5 月に登録申請した学術会議の登録学術研究団体への登録が認められ、第十七期会員の推薦人一人を届け出ることになった。分野は「東洋学」。役員の諸先生には書類作成についてご協力を頂きました。

アジア協会の新役員

フランスのSociété Asiatique （アジア協会. 所在地ー 3, rue Mazarine, 75006 ー Paris, France ）の役員が大幅に変更になった。会長カコ教授が退き、新会長にジマレ教授が選出される等、新人事が今年６月２１日の理事会で決まり、１１月８日の会員定例総会で次のように報告された。

（報告書では名は割愛され、住所が併記してあったが、ここでは省略した）

名誉総裁　J. Leclant　ルクラン
名誉会長＊　A. Caquot　カコ
会長　D. Gimaret　ジマレ
副会長　①　C. Robin　ロバン
　　②　Mme C. Gyss-Vermande ジス＝ヴェルマンド夫人
書記　①　J.L. Bacque-Grammont バック＝グラモン（理事会担当）
　　②　C. Lubrano di Ciccone リュブラーノ＝ディ＝チッツォーネ（例会担当）
会計　J. Lagarce　ラガルス
会報 *Journal Asiatique*の編集・発行責任者　D. Matringe マトランジュ
監査　①　R. Gérard　ジェラール
　　②　J.P. de Morant ド＝モラン

理　事　N. Balbir　バルビール女史
L. Bazin　バザン
M. Boscals de Réals ボスカルス＝ド＝レアルス夫人
C. Caillat　カイヤ夫人
M. Cohen　コーエン夫人
J.P. Drège　ドレージュ
B. Frank　フランク（選出後死去）
P. Garelli　ガレッリ
J. Gernet　ジェルネ
Y. Hervouet　エルヴーエット
G. Lazard　ラザール
P.B. Lafont　ラフォン
D. Lombard　ロンバール
S. Soymié　スワミエ
J. Sublet　シュブレ女史
F. Verellen　ヴェルエレン

〔＊原文はルクラン氏が Président d'honneur、カコ氏が Président honoraireとなっている。邦訳ではどちらも「名誉会長」になってしまうが、現理事のバザン氏が1992年には Président honoraireであったことがある事実から見ると、名誉会長は交代することがあるのかもしれない。いずれ調べてみたいが、ともあれそこで、不変のルクラン氏と内容上で区別を付け、ルクラン氏には意訳を付けた〕　ー福井　記ー

総会報告

昨年度の総会は、平成８年３月１８日に東京の東洋大学・白山校舎にて開催されされた。これに伴い、役員会と公開講演会が同大学内で、更に懇親会が場所を移して行われた。

＜役員会＞

総会に先立ち午後１時から役員会を行い、福井文雅会長をはじめ興膳宏代表幹事、山田利明、坂出祥伸、前田繁樹、田中文雄の各幹事・評議員と、森由利亜会計幹事（羽田正会計幹事が海外出張のため）が、総会に諮るべき事項と会務連絡などを検討した。

＜総会＞

続いて午後３時から、以下のような次第で総会が行われた。

① 開会・議長選出

開会の辞は興膳代表幹事が述べ、続いて通例により福井会長が議長に選出された。

② 会長挨拶

福井会長が挨拶され、会員数が130名になったことを報告した。

③ 会務報告・計画

興膳代表幹事より、１件の報告と２件の計画を提示した。

〔報告〕

『日仏東洋学会通信』（第19･20号）の発行。

〔計画〕

(1)学術会議再登録の件。

５月末日までに再登録しなければならないため、山田幹事がその事務にあたることになった。

(2)『通信』発行回数の縮小の件。

これまでは、日仏会館からの補助金の受給を受けるため、年２回の発行が必要であったが、円高のため補助金がカットされたので、その必要がなくなった。さらに、会費収入に比して発行費が過重であるなどの会計上の問題もあり、当分の間年間１回発行することになった。

④ 会計報告・計画

別表の決算と予算を森会計幹事が報告した。

⑤ 役員改選

当年は役員改選の年にあたるが、役員は全て留任することになった。但し、福井会長が４月から１年間渡仏するため、必要に応じて中谷英明評議員が会長代行の業務を勤めることとなった。また、羽田会計幹事も英国出張中のため、森由利亜会員が会計業務を代行することとなった。

⑥ その他

次回の総会も東京を会場に行われることになった。

⑦ 新会長挨拶

再任された福井会長より挨拶があった。

⑧ 閉会

＜公開講演会＞

「般若心経研究上の諸問題」　　福井文雅

総会終了後、４時より同じ会場で、上記の公開講演が行われた。

講演者の研究領域は広範であるが、般若心経研究も研究テーマの一つであり、既に1984年に「般若心経の歴史的研究」で早稲田大学より文学博士の学位が授与され、1987年には同名の著作を春秋社から出版されている。本講演はこれらを踏まえ、他領域の研究者にも理解しやすいように、従前の研究と自説を整理し、今後の研究すべき問題にまで及んだ。

具体的には、経題と偽（密呪）の問題、つまり般若心経は「空」を説く経なのか、それとも密呪を中心とするのかということを研究史の中からとらえ、併せて歴史・社会との関係について解説された。また、最近の「偽経」説に対しても論評された。従来の問題点としては、中国仏教研究と中国研究の乖離、「多心経」という略称の問題、宋代以後の受容の実態、道教（全真教）との結び付き、本文の論理構造の分析の欠如や、中国学の立場からの研究の欠如などをあげられた。今後の問題点としては、日本流布本のみにある「一切」と尾題の挿入理由、空海独自の解釈や、羅什訳とされる経の真偽などをあげられた。

＜懇親会＞

全ての公式の行事の終了後、場所を白山の魚与に移し、夕食を兼ねた懇親の会を行った。当所は魚屋の直接経営する料理屋なので、山海の珍味を堪能しながら、懇談の一時を持つことができた。

（田中文雄記）

日本学術会議だより　No. 39

高度研究体制の早期確立についての要望が採択さる

平成7年11月　　日本学術会議広報委員会

今回の日本学術会議だよりでは，10月に開催された日本学術会議第122回総会の概要と、総会初日に採択された「高度研究体制の早期確立について（要望）」の内容を紹介します。

日本学術会議第 122回総会は、平成7年10月25日（水）から3日間にわたって開催されました。

総会初日は、まず、報告が行われ、会長経過報告及び科学技術会議報告に続き各運営附置委員会、各部、複合領域研究連絡委員会運営協議会、各常置委員会及び各特別委員会の報告がそれぞれの委員長・部長等から行われました。

この中で、利谷広報委員会委員長から、①日本学術会議月報の充実に伴い、会員各位からの原稿執筆の協力要請、②平成8年度の公開講演会の企画の募集を2月連合部会時に行うので、会員各位への事前検討要請、③日学選書の出版件数の拡大のための企画募集、④前日に開催した広報委員と地区会議代表幹事との連絡会議の議事から、地区会議の抱える問題点の紹介、の4点について付言がありました。

また、第7常置委員会、学術と産業特別委員会及び阪神・淡路大震災調査特別委員会からは、それぞれ、総会報告に付して、①国際対応の目的や役割をまとめ、それに対する日本学術会議内外からの意見を集約することで、日本学術会議としての国際対応の立場の構築をめざしてまとめられた「日本学術会議と国際対応（仮題）」、②学術の新たに進むべき方向に指標を与え、より高度な産業への貢献の方向を定めるのに必要な価値判断の基準を与えることの第一歩を踏み出すための端緒となるべくまとめられた「歴史的転換期における学術と産業のかかわりについて」、③事態の緊急性にかんがみ、意見のまとまったものから順次これを報告したいとの趣旨から「強震観測網の充実と強震研究体制の整備について」と「災害医療体制の整備について」の2件についてをその第一段階として位置付けてまとめられた「阪神・淡路大震災調査特別委員会第一次報告」が会員に配布されました。

この後、会員推薦管理会報告及び各研究連絡委員会報告に続いて、アジア学術会議実行委員長報告があり、西島委員長から、明年3月に開催予定の第3回アジア学術会議を中心とした今後の進め方について発言がありました。

続いて、提案事項の説明・討論・採決に入り、「内科系科学」と「外科系科学」に分かれている第7部の専門を見直して統合すること及び第17期に向けて、研究連絡委員会を見直し、改廃、統合、名称変更を行うことを内容とした①「日本学術会議法施行令」の一部を改正する手続きを進めること、②「日本学術会議会則」の別表の一部改正、③「日本学術会議の推薦に係る研究連絡委員会の指定等に関する規則」の別表の一部改正、④複数の研究連絡委員会にまたがる専門委員会の設置を認めることを内容とした「日本学術会議の運営の細則に関する内規」の一部改正、⑤会員推薦管理会が学術研究団体の登録を審査するに際して、資料を得る必要があると認められる場合には、日本学術会議の意見を聴取できるようにするための「学術研究団体の登録に関する規則」の一部改正、⑥今後における日本学術会議の組織、機能、施設等のあり方について、中・長期的観点から検討することを任務とした「運営審議会附置将来計画委員会」の設置についてを、それぞれ賛成多数で可決しました。

さらに、⑦21世紀を目前に控え、我が国の学術研究の飛躍的発展を図る観点から、研究費、研究者及び研究機構について抜本的な改善充実を図り、我が国の学術研究体制を一挙に高度の水準に引き上げ、高度研究体制の早期確立の実現を目指した「高度研究体制の早期確立について（要望）」を賛成多数で採択しました。

引き続いて、⑧「脳の科学とこころの問題」を脳科学の視点からまとめた脳の科学とこころの問題特別委員会の対外報告案について討議を行いました。会員から活発な意見が出されたため、審議を2日目に持ち越して検討した結果、運営審議会で一部修文を行うことを条件として、賛成多数で対外報告とすることを了承しました。

2日目の最後に、前日配布された第7常置委員会の「日本学術会議と国際対応（仮題）」に基づき会員の間で自由討議が行われ、活発な意見交換がありました。

伊藤会長が村山総理に要望書を手交

平成7年10月30日（月）の午後3時に伊藤会長及び利谷、西島両副会長が内閣総理大臣官邸に村山総理大臣を訪ね、総理府の担当大臣である野坂内閣官房長官の立会いの下、平成7年10月25日（水）の第122回日本学術会議総会で採択された「高度研究体制の早期確立について」の要望書を手渡し、その趣旨等について説明を交えながら、懇談を行いました。

村山総理は、「要望の趣旨については、大変よく理解でき、貴重なご意見を賜ったものと思う。しかし、例えば、研究費の倍増についての要望などは、シーリングの枠もあり、容易ではない。補正予算で配慮したりして、政府もいろいろ努力はしている。今後とも期待に沿うよう努力する。」と語り、要望書について理解を示しました。

なお、要望書の内容は以下のとおりです。

高度研究体制の早期確立について（要望）

学術研究が我が国はもちろん、世界全体にとってもその将来を左右する重要な役割を担うという認識が政・官・産を通じて最近とみに高まってきたことは喜ばしいことである。しかしその一方、我が国の学術研究体制にはなお制度的、構造的な多くの問題が顕在化している。

日本学術会議では、平成元年4月20日付け「大学等における学術研究の推進について－研究設備等の高度化に関する緊急提言－」の勧告を提出し、政府関係機関においても、このような現状を踏まえ、学術研究体制の改善のための様々な施策が講じられている。しかしなお、21世紀を目前に控え、我が国の学術研究の飛躍的発展を図る観点から、研究費、研究者及び研究機構について抜本的な改善充実を図り、我が国の学術研究体制を一挙に高度の水準に引き上げ、高度研究体制を早期に確立することが不可欠である。科学者の代表機関として、日本学術会議は以下の点を早急に実現することを要望する。

1．研究費について

我が国の研究費の政府による負担割合、政府負担研究費の対ＧＮＰ比を欧米先進諸国並みに引き上げ、政府の研究開発投資額を早期に倍増させることが必要である。

その際、基礎研究、応用開発研究に加えて、将来における応用の潜在力に注目した「戦略研究」のそれぞれについて助成を強化するとともに、国費による投資的経費としての研究費の支出、民間の研究助成財団の活動の促進などにより、多元的な研究資金源を確保することが必要である。

2．研究者について

優秀な研究者を確保する観点から、研究費、研究施設等について劣悪な状況にある研究環境を早急に改善することが必要である。

また、ポストドクトラルフェローシップの飛躍的拡充など研究者の雇用形態の多様化を図るとともに、若手研究者の支援施策の改善充実、公正で多角的な評価システムの確立、外国人研究者の任用も含めた研究者の国際的な交流の促進などにより、研究者がその研究能力を最大限に発揮する条件を整えることが必要である。

3．研究機構について

大学、研究所（国公立試験研究機関、民営研究機関、大学共同利用機関及び大学の附置研究所をいう。）、企業の3セクターの調和のとれた発展、規模的に不十分な研究所セクターの拡充を図るとともに、これらの間の人的交流や研究協力を促進することが必要である。

また、急速に進展する学問の最前線に立って常に高い研究活動を維持するため、研究組織に安定性と流動性の二重性を導入するとともに、我が国の学術研究体制の重大な問題となっている研究支援者の不足について、所要の対策を講じる必要がある。

4．国際的連携について

世界に開かれた共同研究の拠点の整備、研究助成を目的とする基金の設定など、研究者の国際交流、共同研究等の促進のため、所要の措置を講じる必要がある。その際、アジアの一員として、アジア地域に対しては特段の配慮が必要である。

日学双書の刊行案内

日本学術会議主催公開講演会の記録をもとに編集された次の日学双書が刊行されました。

日学双書№23「歴史的転換期における学術と産業の在り方をめぐって」

〔定価〕 1,000円（消費税込み，送料別途）

※問い合わせ先

㈶日本学術協力財団　☎ 03-3403-9788

日佛東洋學會會員名簿

赤松　明彦
AKAMATSU Akihiko

秋山　光和
AKIYAMA Terukazu

ｱﾝｻｰﾙ、　ｵﾘｳﾞｨｴ
ANSART, Olivier

蘆田　孝昭
ASHIDA Takaaki

ｼｬｴﾘｴ、　ｲｻﾞﾍﾞﾙ
CHARRIER, Isabell

竺沙　雅章
CHIKUSA Masaaki

ﾃﾞﾚｱﾇ、　ﾌﾛﾘﾝ
DELEANU Florin

ﾃﾞｭｹﾝﾇ、　ﾛﾍﾞｰﾙ
DUQUENNE, Robert

ﾃﾞｭﾙﾄ、　ﾕﾍﾞｰﾙ
DURT, Hubert

江上　波夫
EGAMI Namio

遠藤　光曉
ENDO Mitsuaki

藤枝　　晃
FUJIEDA Akira

福井　文雅
FUKUI Fumimasa

福島　　仁
FUKUSHIMA Hitoshi

ギメ美術館
Guimet(Musee)

濱田　正美
HAMADA Masami

羽田　　正
HANEDA Masashi

服部　正明
HATTORI Masaaki

平井　宥慶
HIRAI Yuhkei

平川　　彰
HIRAKAWA Akira

廣川　堯敏
HIROKAWA Takatosh

堀池　信夫
HORIIKE Nobuo

市古　貞次
ICHIKO Teiji

井狩　彌介
IKARI Yasuke

池田　　温
IKEDA On

生田　　滋
IKUTA Shigeru

石田　秀實
ISHIDA Hidemi

石田　憲司
ISHIDA Kenji

石上　善應
ISHIGAMI Zenno

石井　米雄
ISHII Yoneo

石澤　良昭
ISHIZAWA Yoshiaki

岩田　　孝
IWATA　Takashi

彌永　信美
IYANAGA Nobumi

彌永　昌吉
IYANAGA Shokichi

門田　眞知子
KADOTA Machiko

柿市　里子
KAKIICHI Satoko

日佛東洋學會會員名簿

金谷　治
KANAYA Osamu

神田　信夫
KANDA Nobuo

狩野　直禎
KANO Naosada

鹿島 有希子
KASHIMA Yukiko

加藤　純章
KATO Junsho

川合　康三
KAWAI Kozo

川本　邦衛
KAWAMOTO Kunie

川崎ミチコ
KAWASAKI Michiko

菊地　章太
KIKUCHI Noritaka

木津　祐子
KIZU Yuko

小林　正美
KOBAYASHI Masayos

小谷　幸雄
KOTANI Yukio

古藤　友子
KOTOH Tomoko

興膳　宏
KOZEN Hiroshi

栗原　圭介
KURIHARA Keisuke

楠山　春樹
KUSUYAMA Haruki

桑山　正進
KUWAYAMA Shoshin

京戸　慈光
KYODO Jiko

前田　繁樹
MAEDA Shigeki

丸山　　宏
MARUYAMA hiroshi

増尾伸一郎
MASUO Shin'ichiro

松原　秀一
MATSUBARA Hideich

御牧　克己
MIMAKI Katsumi

三崎　良周
MISAKI Ryoshu

宮澤　正順
MIYAZAWA Masayori

森　由利亞
MORI Yuria

森賀　一恵
MORIGA Kazue

森安　孝夫
MORIYASU Takao

明神　　洋
MYOJIN Hiroshi

中村　　元
NAKAMURA Hajime

中村　瑞八
NAKAMURA Shohachi

中谷　英明
NAKATANI Hideaki

成瀬　隆純
NARUSE Takazumi

成瀬　良徳
NARUSE Yoshinori

小河　織衣
OGO Orie

岡本　さえ
OKAMOTO Sae

岡本　天晴
OKAMOTO Tensei

丘山　　新
OKAYAMA Hajime

岡山　　隆
OKAYAMA Takashi

大久保泰甫
OKUBO Yasuo

小名　康之
ONA Yasuyuki

大谷　暢順
OTANI Chojun

尾崎　正治
OZAKI Masaharu

定方　　晟
SADAKATA Akira

齋藤　希史
SAITO Mareshi

坂出　祥伸
SAKADE Yoshinobu

酒井　忠夫
SAKAI Tadao

阪本(後藤)純子
SAKAMOTO-GOTO Jun

櫻井　清彦
SAKURAI Kiyohiko

澤　　美香
SAWA Mika

白杉　悦雄
SHIRASUGI Etsuo

白戸　わか
SHIRATO Waka

庄垣内正弘
SHOGAITO Masahiro

菅原　信海
SUGAHARA Shinkai

日佛東洋學會會員名簿

砂山　稔
SUNAYAMA Minoru

鈴木　薫
SUZUKI Tadashi

高橋　稔
TAKAHASHI Minoru

高崎　直道
TAKASAKI Jikido

高田　時雄
TAKATA Tokio

武内　紹人
TAKEUCHI Tuguhito

田中　文雄
TANAKA Fumio

舘野　正美
TATENO Masami

徳永　宗雄
TOKUNAGA Muneo

礪波　護
TONAMI Mamoru

虎尾　達哉
TORAO Tatsuya

坪井　善明
TSUBOI Yoshiharu

都留　春雄
TSURU Haruo

梅原　郁
UMEHARA Kaoru

ワッセルマン、ミシェル
WASSERMAN, Michel

渡會　顯
WATARAI Akira

八木　徹
YAGI Toru

山田　均
YAMADA Hitoshi

山田　利明
YAMADA Toshiaki

山本　澄子
YAMAMOTO Sumiko

山本　達郎
YAMAMOTO Tatsuro

山折　哲雄
YAMAORI Tetsuo

矢野　道雄
YANO Michio

吉田　敦彦
YOSHIDA Atsuhiko

吉田　敏行
YOSHIDA Toshiyuki

吉田　豐
YOSHIDA Yutaka

湯川　武
YUKAWA Takeshi

由木　義文
YUKI Yoshifumi

遊佐　昇
YUSA Noboru

湯山　明
YUYAMA Akira

編　集　後　記

昨年10月フランク先生の突然の訃報に接した。奇しくも先生の愛弟子ロベール教授の滞日中といい、福井会長の滞仏中というのも、先生の日本への思いを象徴しているようである。献花・献辞など一切を会長に委ねたが、これもフランスの事情をよくご存じの会長の機転で、破格の対応を受けたようである。それにしても、長身痩躯のあの風貌に接し得ないのかと思うと、一抹の寂しさを感じないわけにはいかない。ご冥福を祈る。合掌

会長からはフランス学界の多くの情報が送られてきた。出来るだけ多くの記事を掲載して、多くの人に読んでもらいたい。そんな気持ちから、かなりの記事を載せることになった。殆ど特集に近いが、日本にいては知ることのできない情報であり、感謝したい。全く、本誌の特派員のごときである。

もう一人の特派員は興膳幹事。やはりパリから原稿を送っていただいた。新刊紹介の「スワミエ教授献呈論集」は、福井・興膳両氏の合作という。

編集担当は、菊池章太・田中文雄・山田利明。

投　稿　規　定

会員諸氏からの投稿を募ります。打ち出し原稿の場合は、

用紙：Ａ４
印字：10ポイント
桁数：20字
行数：38行

を基準にしてください。手書きでお送り頂いても構いません。

日仏東洋学会 **通信** 第21号
1997年2月20日

編　集　日仏東洋学会
発行者　福井　文雅
〒162 東京都新宿区戸山1-26-1　早稲田大学
文学部　福井文雅研究室　Tel:03-3203-4141
Ext.2482
発行所　〒806 京都市左京区吉田本町　京都大学文学部
興膳　宏研究室　Tel:075-753-2808
FAX 075-761-0692(京都大学文学部)

印刷所　六稜舎　〒530大阪市北区浪花町9-12-402
Tel:06-371-1681